# 京　原

山梨県東八代郡境川村京原遺跡調査報告書

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

# 京　原

山梨県東八代郡境川村京原遺跡調査報告書

山梨県教育委員会

山梨県遺跡調査団

# 序

曽根丘陵地帯は，八ケ岳山麓地帯と相並んで遺跡の最も豊富なところであります。分布調査によりますと，先土器時代から縄文，弥生，古墳の各時代の遺跡の数は無尽蔵とも思える程の状況を呈しております。

京原遺跡はこの丘陵上にある道路の拡巾のため調査されたものであり，古墳時代前期の，いわゆる五領式土器を伴う住居址数軒を中心とするものであります。その他，残念ながら遺構の検出にまで至りませんでしたが縄文式土器も多数発見されております。

五領式土器といえば，土師式土器の初現期の土器として学界から注目され，今や弥生時代から古墳時代への変遷の重要な鍵をとく土器と言われております。今日，研究者の間にもさまざまな考えが呈示されており，統一的な見解にまで至っていないと聞き及んでいますが，本県においても何ら研究の進んでいない分野であります。その最大の原因はこの期の遺跡が発見されなかった事にもありますが，やはりこの分野の研究者の不足にもありましょう。このような意味からしても，今回五領式土器を伴う遺跡が調査されたことは本県における今後の研究に貴重な資料を提供することになろうかと思います。

発掘面積はわずか４～５ｍの拡巾区域内という制約があったにもかかわらず，住居址の発見があいつぎ，調査が無事終了することができましたのは，担当者の野沢昌康先生を初め調査員各位，また一部私有地発掘を心よくご了承下さった地主の角田義治氏，並びに境川村文化財関係者各位の努力の賜であり，ここに深く感謝申し上げる次第であります。

最後になりましたが，報告書刊行に際し，調査員各位及び学生諸君には一方ならぬご尽力とご協力をいただきましたことに対し，深甚なる謝意を表します。

昭和49年３月31日

山梨県教育委員会

教育長　清　水　林　邑

# 例　　言

1. 本書は，金川曽根地区大規模農道建設に伴い，発見された京原遺跡の調査報告書である。

1. 京原遺跡は，境川村小山地区のかなり広範囲に亘る遺跡であり，今回調査した地点もその一部に含まれるため，京原遺跡と認定した。

1. 発掘調査は昭和48年７月16日から同年８月４日までの20日間に亘って実施した。

1. 調査は山梨県遺跡調査団常任幹事　野沢昌康が担当し，調査員に折井忠義，早川方明，渡辺礼一，萩原三雄，桜林芳秋，県文化財主事　森和敏が当った。

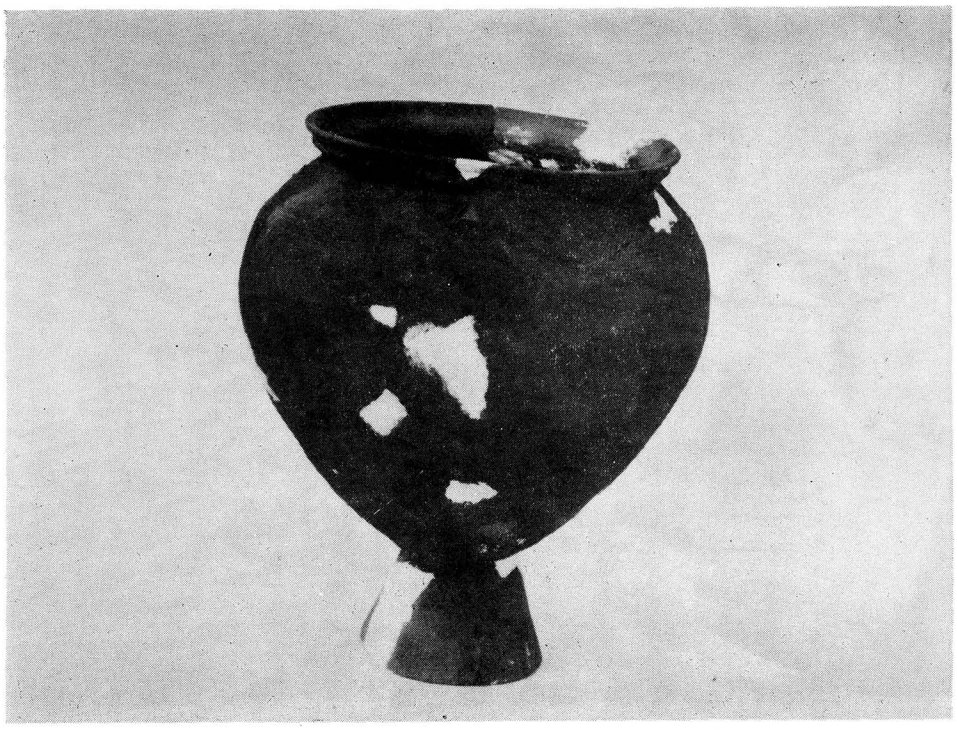
1. 本書は渡辺礼一，森　和敏，萩原三雄，小野正文がそれぞれ分担し執筆した。
また種子については，理学博士　植松春雄氏に鑑定等を依頼し，報告を願った。

1. 遺物図面の整理実測には，早稲田大学　加藤正治，沼本芳喜，斉藤裕嗣，国学院大学　小野正文，山梨大学　室伏　徹の諸君のご協力をいただいた。

1. 本書の編集は萩原が担当した。

1. 写真の撮影は 森 が担当した。

1. 種子は本遺跡３号住居址の床直上あるいは床内部から調査終了間ぎわに清掃中検出したものである。
同住居址に伴出するものであるかどうか断定はできかねるが，参考とし一応の報告にとどめた次第である。



京 原 遺 跡（航空写真）

# 目　　次


序　　論　　野沢昌康

第1章　位置と環境……森　和敏……1

第2章　調査の経過……渡辺礼一……2

第3章　集落址の調査……萩原三雄……10

第1節　1号住居址の遺構……10

第2節　2号住居址の遺構と遺物……10

第3節　3号住居址の遺構と遺物……17

第4節　4号住居址の遺構と遺物……18

第5節　考　　察……24

1.　集落址の様相……24

2.　京原土器群の様相……24

3.　本県における類似遺跡……27

4.　「有段口縁」を有する台付甕形土器を中心として……29

第4章　出土種子……36

第1節　種子の出土状態と発芽した後の成育状況……森　和敏……36

第2節　出土種子と播種後の成育状況……植松春雄……37

第5章　縄文時代の遺物……小野正文……39

第1節　はじめに……39

第2節　出土遺物……39

第3節　考　　察……43

第6章　墓　　拡……萩原三雄……46

附　　記……48

# 挿　図　目　次


第 1 図　遺跡付近地形図

第 2 図　京原遺跡グリッド図……3～4

第 3 図　土　層　図……7

第 4 図　集落址実測図……11～12

第 5 図　1号住居址実測図……13

第 6 図　2号住居址実測図……14

第 7 図　2号住居址出土土器実測図 (1) ……15

第 8 図　2号住居址出土土器実測図 (2) ……16

第 9 図　3号住居址実測図……17

第10図　4号住居址実測図……19

第11図　4号住居址出土土器実測図 (1) ……20

第12図　4号住居址出土土器実測図 (2) ……21

第13図　4号住居址出土玉類実測図……23

第14図　出土土器拓影 (1) ……40

第15図　出土土器拓影 (2) ……41

第16図　石器実測図……42

第17図　蔵骨器出土状況実測図……46

第18図　蔵骨器実測図……47

# 図 版 目 次


図 版 1.　(1) 遺 跡 遠 景……51
　(2) 遺 跡 近 景……51
図 版 2.　(1) 発 掘 状 況……53
　(2) 1号住居址及び4号住居址……53
図 版 3.　(1) 2 号 住 居 址……55
　(2) 2号住居址出土土器……55
図 版 4.　(1) 3 号 住 居 址……57
　(2) 同 上　ピット……57
図 版 5.　(1) 3号住居址出土種子……59
　(2) 同 上 ……59
図 版 6.　(1) 4 号 住 居 址……61
　(2) 同上　土器出土状況……61
図 版 7.　(1) 4号住居址ピット及び土器出土状況……63
　(2) 同 上 ……63
　(3) 玉 類 出 土 状 況……63
図 版 8.　(1) 4号住居址玉類出土状況……65
　(2) 同 上　土器出土状況……65
図 版 9.　4号住居址出土土器……67
図 版 10.　4号住居址出土土器及び蔵骨器……69
図 版 11.　蔵 骨 器……71
図 版 12.　縄 文 式 土 器……73
図 版 13.　縄 文 式 土 器……75
図 版 14.　縄 文 式 土 器……77
図 版 15.　石器及び玉類……79
図 版 16.　種子の育成状況……81

# 序　　論

近年，本県における遺跡の調査研究は加速度的にその数を増している。

古く坂井遺跡，日下部遺跡を発端に国分寺周辺，曽根丘陵地帯，八ケ岳山麓等，今や県内あらゆるところに調査は及んでいる。この中でも縄文時代と古墳時代の集落址がほぼ大半を占めているが，古墳時代の集落址の調査，研究を分析，比較してみると，本県の場合，前期五領期，中期和泉期においてはその例は極めて少ない。後期鬼高期，晩期真間期もその数は少なく，国分期特に奈良，平安時代に集中する傾向を示している。

京原遺跡は調査が進むに従い五領式土器が多数検出され，最終的に四軒の住居址を検出するに至った。

五領式土器は，五領遺跡が杉原荘介氏等の手によって調査されて以来，その資料は累積し，報告も各地に及んでいる。しかしながら，弥生式土器との接触点にあろうこの種の土器について，さまざまな論説があり，未だ定着していない感を受けないでもない。いわんや本県においては，五領式土器を伴う住居址の調査は初めての事であり，しかも弥生式土器の実態も解明されていない今日，ほとんど空白の分野と言えよう。

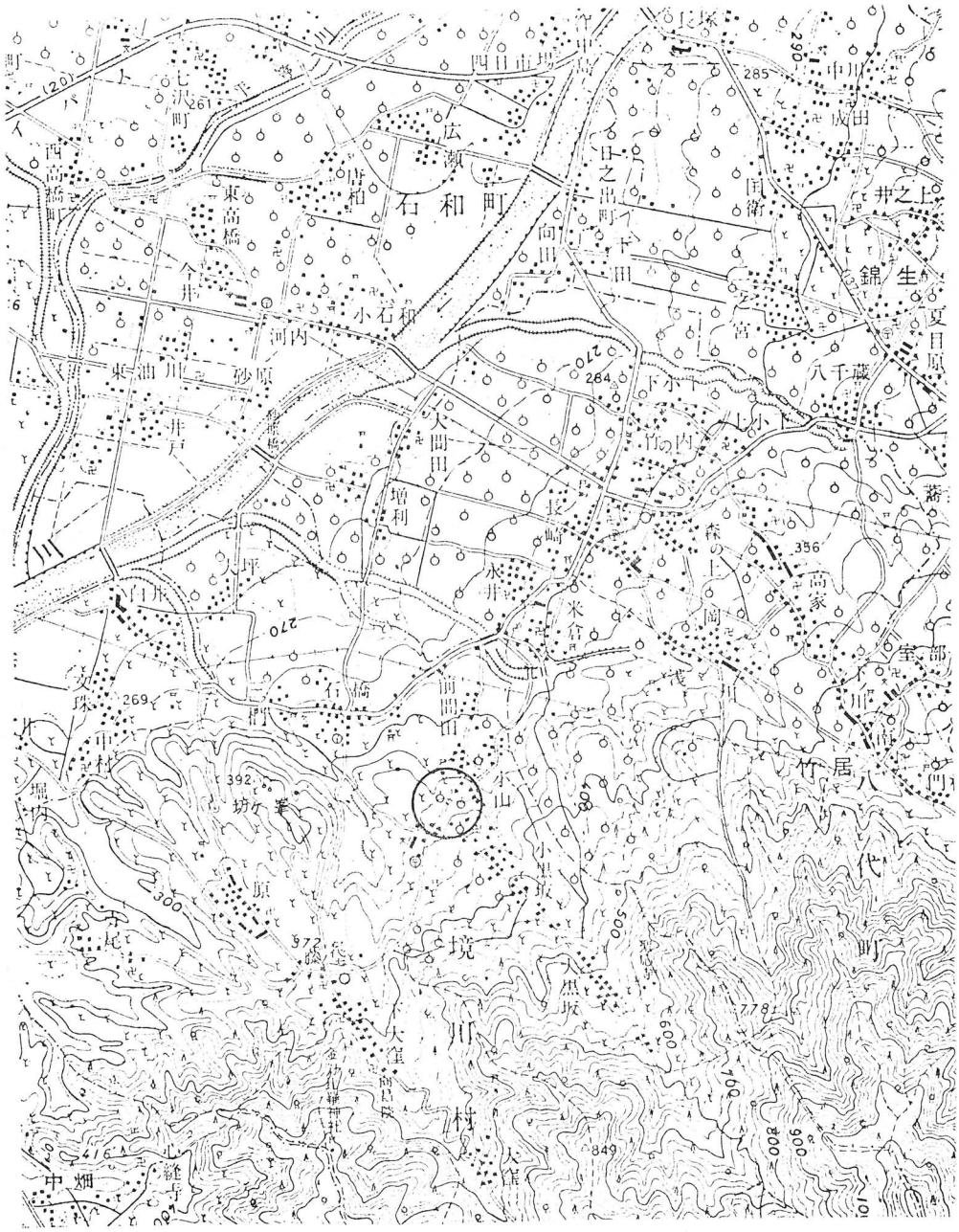
五領式土器を伴う遺跡は古墳時代前期の社会，文化研究にとって貴重な資料となっているものである。五領期の研究が混沌としている学界の現状からすれば，規模の大小を問わず，この種の遺跡を調査し報告することは，たとえ一資料の提供という形に留まるにしても，今後の研究に若干でも寄与することができるであろう。

京原遺跡調査の直接のきっかけは道路拡張のためであり，それも，ほんのわずかな面積でしかない。それでも，四軒の住居址が検出できたのは，隣接の土地の地主さん，村の皆さんの暖かいご好意によるものである。この付近には，まだまだ無尽蔵と言われる程遺跡は存在していよう。いずれ，本格的な調査を行なう日が来る事と思う。その時を期待しつつ今回は，調査の概報にとどめる次第である。

炎天下の発掘のため，調査は困難を極めた。にもかかわらず最後まで調査することができたのは，地元のみなさん，あるいは学生諸君のご協力によるものである。また小出義治氏には，わざわざ遠い所までお越しいただいてご指導をいただいたことは，まことに感謝にたえないところである。更に杉山博久氏には報告書作成に際し，数々のご教示をいただいた。文末ながらお礼申し上げたい。

なお，この報告書作成にあたり県文化財主事　森和敏氏，調査員の渡辺礼一氏，萩原三雄氏，国学院大学学生　小野正文君その他多数の学生諸君のご苦労は，なみなみならぬものであったことを特に記して序論にかえる次第である。

野　沢　昌　康



石和町
広瀬
唐柏
東高橋
今井
小石和
河内
東油川
砂原
井戸
大間田
増利
長崎
永井
米倉
森の上
高家
竹居
竹の内
八千蔵
錦生
中川
成田
国衛
向田
下田
日之出町
大坪
白井
文珠
石橋
前間田
小山
小黒坂
大黒坂
境川村
大窪
中畑


**第1図**　遺跡付近地形図

# 第1章　位置と環境

京原遺跡は甲府盆地東側に連なる曽根丘陵上に有する。地籍は東八代郡境川村小山小字神の前480番地にあり，標高は約350m前後の地点に営まれている。

この丘陵は西に甲府盆地を一望に眺める典型的な舌状台地で，京原は東北の小黒坂及び大黒坂がある沢と南西に藤垈及び大窪がある沢に囲まれている。東南は御坂山系を越える芦川渓谷となる。両側の谷（沢）は現在は湿田や畑になっていて湧泉もある。京原との比高差は約10～20mである。

曽根丘陵全域に亘って遺跡は数多く存在するのであるが，ほとんど沢に囲まれた台地状に営まれている。京原もこの台地上全域に存在するのであるが，調査の結果から，遺構の存在する地点は表土からソフトローム層まで約1mあるが，遺構の存在しない地域はほとんど30cm～50cmでローム層に達するのである。京原を見る限り，台地上の比較的低地に住居が営まれたと考えられ，住居構築上まことに興味深いことである。

京原周辺の遺跡の概況は次のとおりである。京原から東北へ約100mの同じ台地上には，弥生式土器が耕作中発見されており，相当の分布が認められる。また同台地の約100m上方には宅地造成中に縄文時代前期諸磯式土器の出土をみている。本遺跡の縄文式土器群との関連性が考えられよう。京原から盆地底部に至る間500mの地帯は縄文時代前期から弥生時代，古墳時代の遺物が広範囲に亘り散布している。また農耕中，遺物が発見された例が相当あるように聞いている。この台地の西には室屋遺跡のある台地があり，北には50基以上の古墳群のある台地がある。

このように京原周辺地域には多数の遺跡は存在するのであるが，古墳時代に限って言えば古墳時代前期～中期頃の遺跡が最も多く，国分期以降の例は極めて少ない事が指摘できよう。また古墳自体でも後期古墳と比較して，前期古墳の占める割合は圧倒的に多いのである。

このような歴史的環境の中で今回報告する遺跡は，かなり広範囲に亘る京原遺跡の極く一部であると言えよう。

（森　　和　　敏）

# 第2章　調査の経過　（調査日誌から）

京原遺跡発掘調査は昭和48年7月16日から8月4日までの20日間にわたって実施した。調査日誌に基づく発掘経過は次の通りである。

**7月16日（月）　晴れ**

暑い時期の発掘作業のため，発掘成果に対する期待も大きい反面作業の見通しは，困難を思わせるものがある。

発掘調査の準備に着手。資材の調達，同時に現場への運搬，現場に近い宇佐美家の好意で物置を借用し，道具類の搬入を行ない，発掘作業に備える。さらに，境川村の方々の協力を得るための動員体制を役場に連絡し，今回の発掘調査の日程のメドを立たせる。

発掘調査の開始に備え，グリッド設定に入る。グリッドは現場の状況に鑑み，1.5m四方のグリッドを設定し，杭打の作業を進める。各グリッドは東から西へA，B，C，Dと4区に分け，これを南から北へそれぞれ1区から32区に区切り，A1区，A2区～B1区，B2区～C1区，C2区～D1区，D2区の呼称を用い，全部で128区のグリッドを設定した。

**7月17日　晴れ**

調査員をはじめ，地元の方々および夏休みの実習を兼ねた学生が本日から参加。

各グリッド単位に散布している遺物の表面採集を行なう。一通りの表採を終了した段階で各グリッドの調査に入る。

調査員の一部は遺跡周辺の地形図の測量，グリッド図の実測を行なう。

**7月18日　晴れ**

午前8時　作業開始　さわやかな朝の作業を元気いっぱい張り切って行なう。

昨日に引き続きA1区からA11区，B1区からB11区の22区画はチドリ式で発掘し，順次それを拡張する方法で一斉にその作業を行なう。この地区については，かなりの攪乱の様子がうかがわれる。遺物，遺構は検出できない。

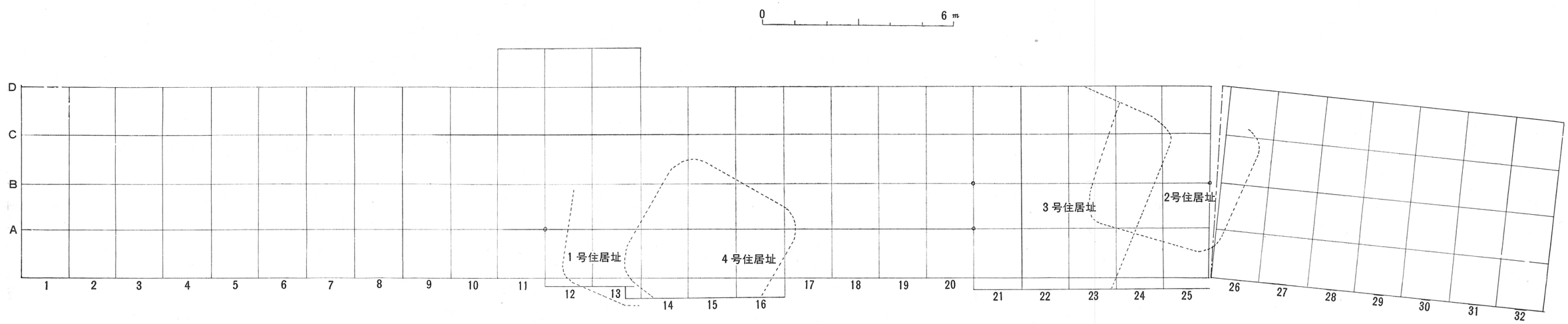
**7月19日　晴れ**

A12区から早くも竪穴状らしき落ち込みが見られたため，慎重に作業を進める。更にA13区，A14区を拡張し，遺構の確認に努める。A13区で地表から約50cm下で焼土を発見。おおよそのプランも確認でき，1号住居址と認定する。

**7月20日　雲**

A24区，A25区から竪穴のプランが，B24区からも同一面からプランが認められ，これらのグリッドに住居址が発見されるであろうと予想される。C24区から土師器が出土。C24区の地表から68cmの地点で焼土も発見され，炉址を伴う住居址として2号住居址とする。

住居址の概略のプラン，土師器出土地点を実測し，写真撮影のための準備を行なう。




**第2図**　京原遺跡グリッド図

**7月21日　晴れ**

2号住居址の発掘作業と併行して，A12区からA14区を中心に今までに発見された1号住居址のプランを確認する作業を進める。B13区の焼土付近から土師器の小破片が検出された。おおよそのプランが確認できたところで実測し，更に床面の確認作業を行なう。

**7月22日　雲**

A12区から床面と同時に壁を確認すると共に小さな角石を発見する。B13区北東付近からも床面が確認できたので，壁の検出に努める。この住居址は隅丸方形と推定され土師器小破片から古墳時代の前期，いわゆる五領式土器であろうと予測された。本県においては，この種の遺構は，初めての事なので皆張り切って行なう。大体の確認が終えたところで写真撮影と実測図作成に入る。

D11，12区には縄文式土器の破片が多数出土する。遺構の確認のためグリッドを拡張し，検出に努めるが，なんとしてもつかめない。更に地主さんのご好意により，発掘面積を拡張し，レベルを下げていくと石器が出土する。

**7月23日　雲**

昨日に引き続き，D11区付近を中心に調査を進める。土器類，石器など出土するが，遺構が見つからない。縄文式土器片も諸磯式土器が多い。

**7月24日　晴れ**

1号住居址は攪乱が著しいので床面を拡張し壁を捜していく方針で，しかし，住居址の半分以上が攪乱をうけているようである。発見した炉址を立割ると約10cm～15cmの焼土がレンズ状に堆積しており，床面を窪めて炉を構築しているようである。住居址の床面を清掃，東西トレンチの層位実測をし，写真撮影を済す。1号住居址の発掘をほぼ完了させる。

2号住居址については，焼土は何カ所かに認められる。

**7月25日　晴れ**

本日は集中的に2号住居址の調査を進める。2号住居址については，一応グリッドのセクションベルトを残し，住居址内を四ブロックに分ける。第2ブロック（C26区），第4ブロック（C24区）の床面はかなり固くしまっており，確認は容易である。焼土は，かなり広範囲の床面にわたっている。第3ブロック（B25区）には周溝が見つかり，周溝を追いながら同時に住居址の壁を検出する作業を進める。周溝はしっかりしており，良好な状態で残っている。調査を進めていく段階で2号住居址は一応4m四方の住居址で，炉が2つ構築されているだろうと推定される。

第2ブロックを拡張し，周溝の発見に努める。明日を楽しみにして本日の発掘作業は終了する。

**7月26日　晴れ**

昨日と同様に2号住居址の調査を更に進める。第2ブロックと第4ブロックを中心に壁を捜すが見つからない。中央付近では非常に固くしまっている床面も周囲に行くに従い，軟弱になる。他の住居址との複合もあまり考えられない。住居址から一担離れ，もう一度検討することにしよう。

2号住居址の周溝を追っていく途中，周溝の底付近から床面らしき固い層がある。他の住居址の床面の可能性もあるので全体のプランの確認を進めると，隅丸方形の竪穴のプランがはっきり発見された。遺構を3号住居址として認め，2号住居址を終了してから調査に入る予定である。

また1号住居址が出土した区域を更に下げて行くと，ここにも遺構が発見された。焼土も伴い，プランもおおよそ見当がつく。4号住居址とする。

**7月27日　晴れ**

昨日に引き続き，4号住居址の調査を進める。プランもほぼ概略がわかり，床面の検出に努める。土器が出土するが，1号住居址とほぼ時期を同じくする五領式土器である。複合状況から時間的な差は，明確なので良好な資料となるかも知れない。A14区付近の床面を追っていく途中，床面直上から切子玉が出土する。またB14区から土師器片が多数出土する。このB14区付近は床面が非常に固くしまっているので，確認も容易である。出土した土器片もほとんど復元可能なものばかりのようだ。

4号住居址の東半分の確認のため，道路の路肩を少しけずったところ，陶器らしい遺物発見，竹ベラで土を取り除く。遺物の上部には石があり，セクションから土拡であると確認ができる。土拡内から炭が多量に出土している。遺物の出土状況を実測し，写真撮影し，終了後遺物を取り上げる。遺物のまわりには一面に木炭が附着している。

**7月28日　晴れ**

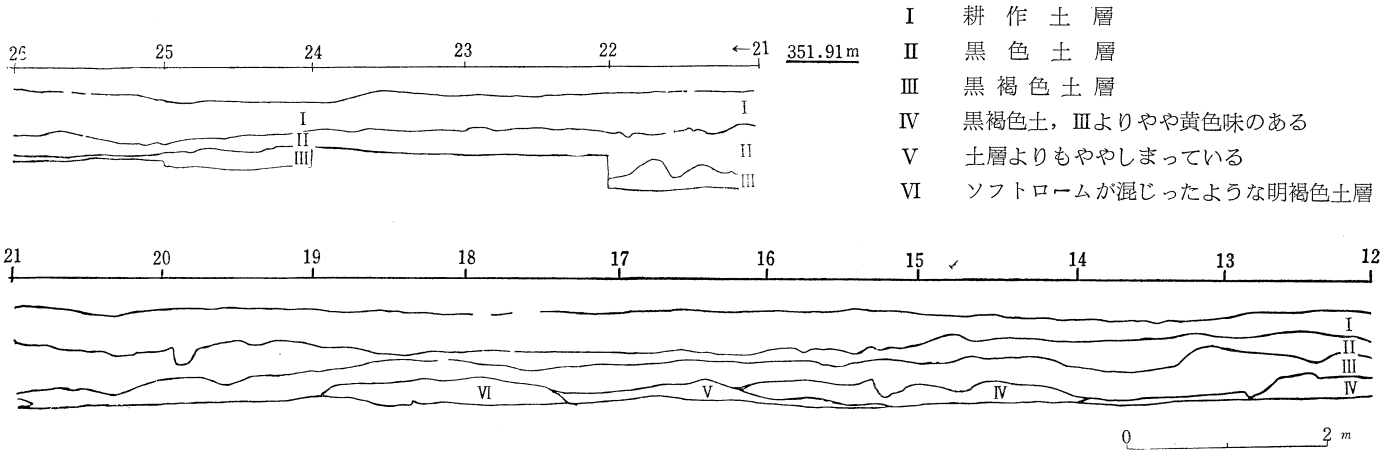
2号住居址は遺物の出土状況の実測と併行して，柱穴等ピットの確認に努める。住居址床面上にあった粘土の東寄りにピットを確認する。写真撮影のため，住居址内の清掃を行ない，一応調査を終える。

先日に引き続き，D区11，12区付近のプランの確認作業に努めるがはっきりしない。

**7月29日　晴れ**

D11区～13区付近の掘り下げ作業を続行し，D11区の拡張部からくぼみ石を発見，まだ床面，焼土は確認できず住居址とのきめてがない。

4号住居址はセクションベルトを除き周溝を確認した。セクションベルトを取り除くと，高杯形土器，壺形土器等が出土した。住居址のほぼ中央と思われる地点から焼土を発見。また炉に使用したと推測される石が混じって検出できた。住居址西側から管玉1，丸玉5，勾玉1が




I　耕作土層
II　黒色土層
III　黒褐色土層
IV　黒褐色土，IIIよりやや黄色味のある
V　土層よりもややしまっている
VI　ソフトロームが混じったような明褐色土層

**第3図**　土　層　図

発見された。柱穴も２つ確認された。

２号住居址の下の３号住居址の調査に入る。西側壁にそって周溝があることが確認できた。３号住居址は２号住居址よりも，床面の状態は良好であるが，遺物はほとんど発見されない。

**８月１日　晴れ**

４号住居址の実測に入る。写真撮影後，土器を取り上げる。これでほぼ４号住居址は，調査を終了する。午後より，遺跡全体の地層図を作成する。

**８月３日　晴れ**

３号住居址の調査を進める途中，床面上から植物の種子を発見。一個所にまとまって，その一部が発芽し検出できたものであるが，遺構に伴うものであるかどうかわからない。とりあえず，出土状況を正確に記録し，一部専門家に分析を依頼するため採集する。本日で３号住居址はほぼ調査を終了する。

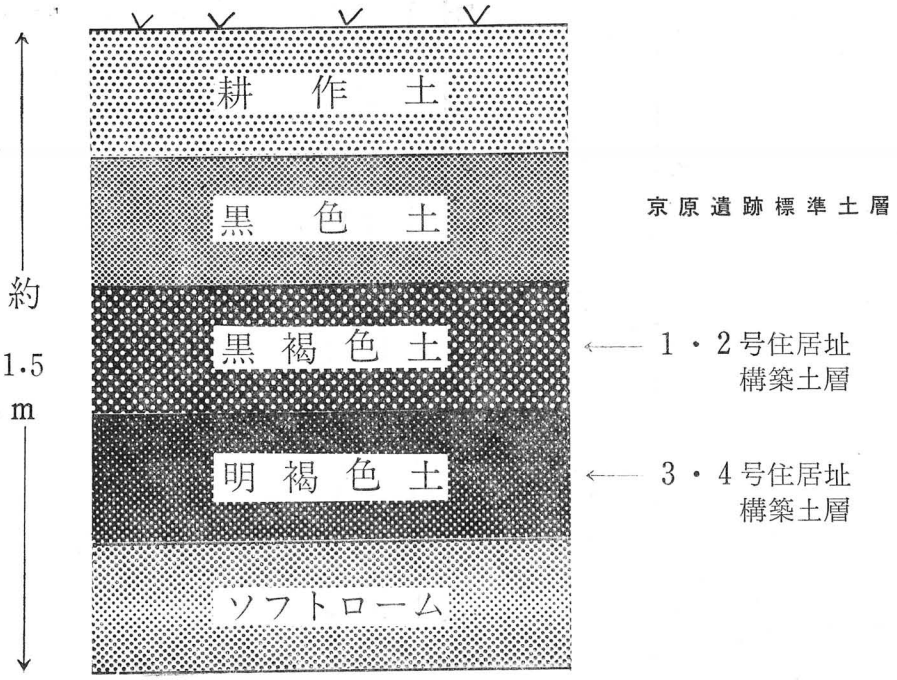
**８月４日　晴れのち雨**

本日をもって発掘調査の全日程を終了する。埋めもどし作業に入る。

種子等未解決の問題もあるので，それらの問題の今後の処置を調査員の会議で協議する。

本日以降，遺物・図面等整理作業に入る。

（渡　辺　礼　一）



## 京原遺跡調査関係者

| | | |
|---|---|---|
| 山梨県遺跡調査団長 | 井出佐重 | |
| 発掘担当者 | 野沢昌康 | |
| 調査員 | 折井忠義 | |
| 〃 | 早川方明 | |
| 〃 | 渡辺礼一 | |
| 〃 | 手塚寿夫 | |
| 〃 | 萩原三雄 | |
| 〃 | 桜林芳秋 | |
| 県文化財主事 | 森　和敏 | |
| 境川村文化財審議員 | 清水信吾 | |
| 〃 | 春日正長 | |
| 〃 | 志村重秋 | |
| 境川村 | 高野久直 | |
| 境川村 | 滝沢きよの | |
| 境川村教育委員会 | | |
| 調査協力者 | 小野正文 | 国学院大学 |
| | 渡辺孝子 | 山梨大学 |
| | 志村美千子 | 〃 |
| | 室伏　徹 | 〃 |
| | 松田幸枝 | 青山学院大学 |
| | 末広公子 | 〃 |
| | 紙屋幸枝 | 〃 |
| | 後藤美弥子 | 日本大学 |
| | 藤森町子 | 山梨英和女子短期大学 |
| | 名執京子 | 〃 |
| | 長谷部秀美 | 〃 |
| | 桜井弘美 | 都立商科短期大学 |
| | 渡辺　毅 | 甲府南西中学生 |
| | 小山田裕己 | 〃 |

# 第3章　集落址の調査（第4図）

近年山梨県における集落址の発掘調査は急激に増加し，現在も何カ所か進められているのが現状である。京原遺跡においても調査が進んでいく中でいわゆる五領式土器が検出され住居址の存在が予想された。道路拡巾地域で調査範囲は4～5m巾という極端に限定された全く悪条件の中でも，検出された住居址は4軒になる。調査区域はかなり長いものであるがその一部25m余りの区域に集中して確認することができた。本遺跡は，既に述べたように付近の地形より若干落ち窪んでいわゆる谷間的地形環境のうえに集落は形成されている。

4軒の住居址はそれぞれ1号址と4号址，2号址と3号址が複合関係を示している。1号住居址は耕作関係等の攪乱により壁と床の一部しか確認できず4号住居址は一部が道路（アスファルト道路）の下に存在するので残念ながら完掘不可能となっている。

2号住居址，3号住居址もそれぞれ攪乱によって，全容は明らかでない。

以上の各住居址は，主軸方向はいずれも南北を示しており，共通性を示している。

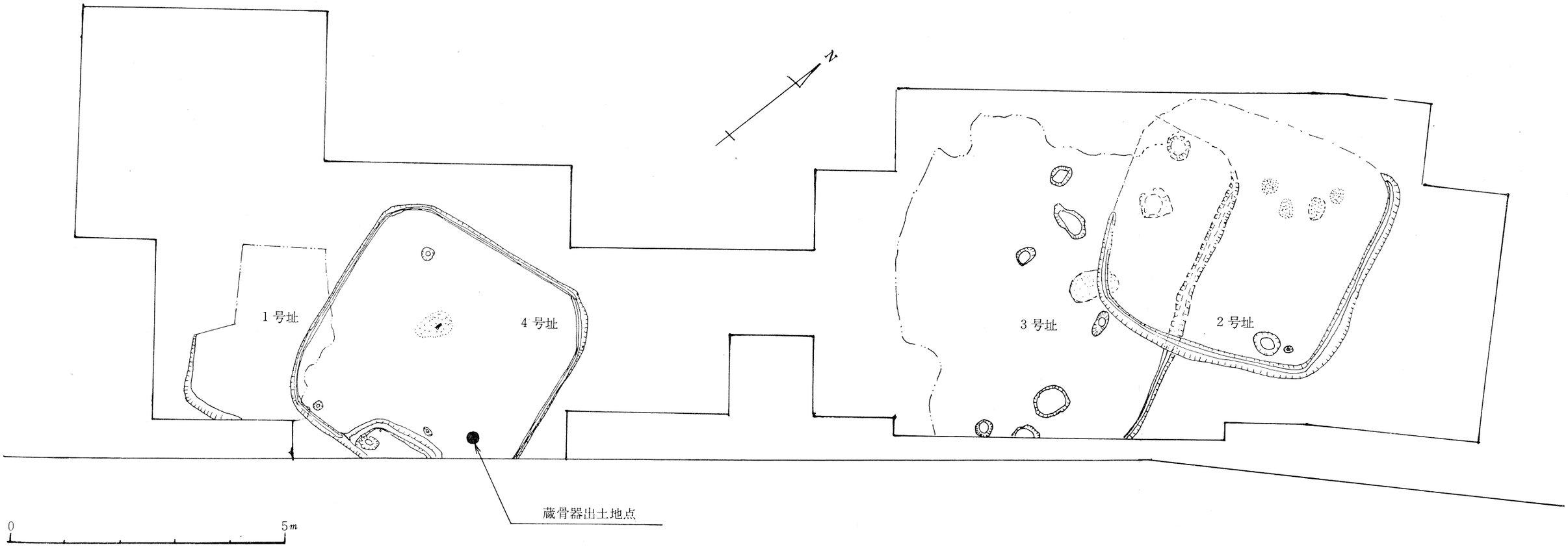
前述の悪条件の下における住居址調査にもかかわらず遺構の概要が把握でき，ほぼ全容が明らかになった事は本県の古墳時代前期遺跡解明に何らかの示唆を与え，足がかりをつかんだ点はまことに幸いとするところである。以下1号住居址から順を追ってその概要を説明してみようと思う。

## 第1節　1号住居址の遺構（第5図）

本住居址は，本遺跡の最も南側に位置している。表土より約50cmの地点で若干焼土を検出し確認されたものである。住居址の破壊は最も著しく，南側の壁と床及び焼土が3ケ所検出された。第3層を掘り込んで構築されている。本住居址のプランは確認できないが隅丸方形を呈するようである。住居址のほぼ中央寄りに焼土が3ケ所検出されたが，そのうち1ケ所は床面を15cm程レンズ状に掘り込んで設置されている。焼土は比較的多く堆積しておりそれに混じって焼けた石が検出されている。床面は非常に堅固で良好である。壁高は，南壁が25cm程であるがピット，周溝らしきものはとくに見られなかった。出土遺物は少なく，器形が判明するものはほとんど検出されなかった。

## 第2節　2号住居址の遺構と遺物（第6図～第8図）

本住居址は，本遺跡の最も北側に位置する。表土から68cmの地点でやはり焼土が検出され遺構が確認できたものである。

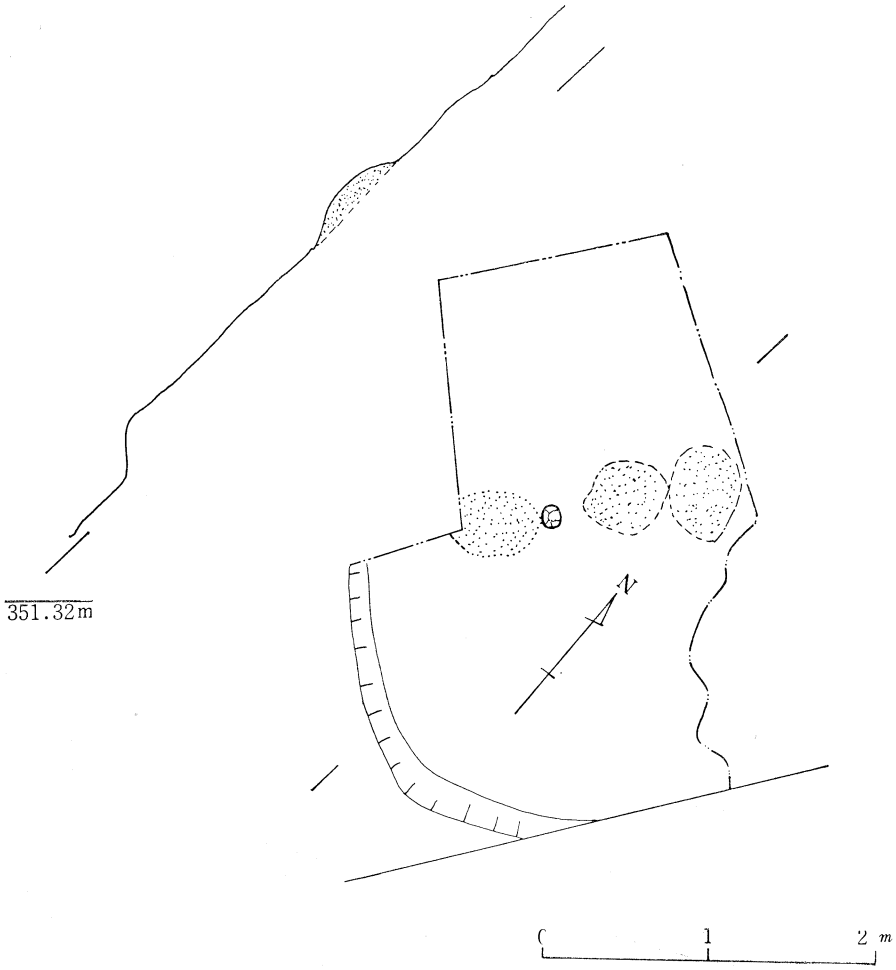



**第 4 図**　集 落 址 実 測 図

## 遺　　構

本住居址は，第3層を堀り込んで構築されている。規模は，東西4.5 m，南北4.5m の隅丸方形を呈する。遺構の南半部は，床面も堅固で良好であり検出は容易であったが北側になるに従い焼土が多くなり床面も貧弱になっていく関係上，検出が困難になった。その上，攪乱等により壁も検出できず，全容をつかむ事は不可能であった。

南東隅に直径60 cm 程のピットが確認できたが，貯蔵穴かと推測できる。それより若干東側に直径15 cm 程のピットも検出されたが柱穴であろうか。柱穴と思われるものは，他には確認することはできなかった。焼土は北側半分に4ケ所で見つかっているがそのいずれもが30〜40 cm 四方の堆積を示し，深さ10 cm 程にレンズ状に堆積している。壁高は，南壁で10cm，東壁でも10 cm 程である。周溝は巾15 cm床面よりの深さ10 cm 程で四周にめぐらされている。




**第5図**　1号住居址実測図

**遺　　物**（第7図，第8図）

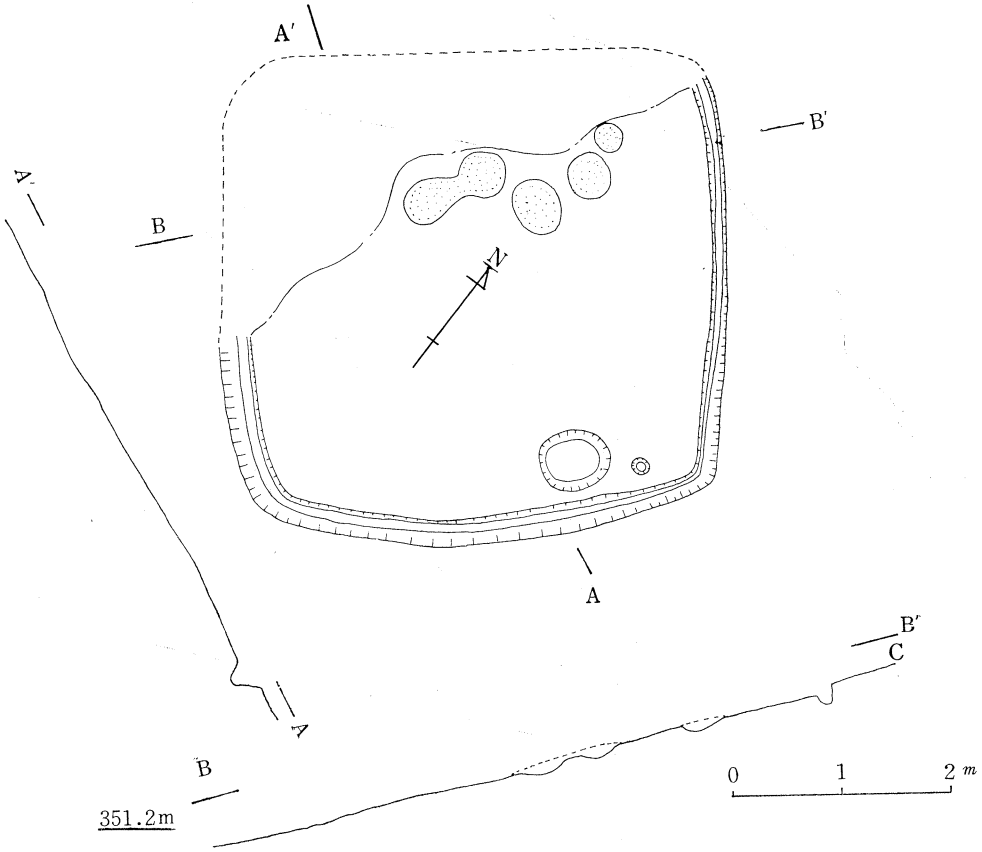
2号住居址の出土遺物は，床直上，あるいは焼土に混入し，多数検出されたが，復元できたのは9個体である。

形態的に甕形土器，高杯形土器，坩形土器，器台形土器が主なものである。以下，順を追って特徴を概述しよう。

**甕形土器**（第7図1～4）

**1．甕形土器**（第7図1）

胴下半部は欠損している。口径12.5 cmを測る。口縁部は有段状となり屈曲する。短かい有段口縁に続く胴部は球形を呈しており，最大径は，胴上半部に求める事ができ，いわゆる肩を有する形態である。全体に煤け黒褐色を呈している。頸部には右から左下へ，胴上半部には左から右下へ細かな櫛目痕を残している。その間を，横位の櫛描平行線が走り，斜格子目文を作り出している。内面はヘラ状器具で仕上げられている。器肉は薄く，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で固く軽い感じがする。また，成形の際の輪積痕を明瞭に残している。




**第6図**　2号住居址実測図

**2. 甕形土器**（第7図2）

胴下半部を欠している。口径13 cmである。1と同形態である。肩に張りがあり，最大径は18 cmを測る。櫛目痕が1より多少粗い。胎土，焼成，整形方法も1と全く同じである。

**3. 甕形土器**（第7図3）

胴下半部を欠している。口径13.3 cmである。胴部最大径は胴中位にあり，15.5 cmを測る。ほぼ球形の胴部から頸部に至り，ゆるやかに「く」の字形に外反する口縁部を呈している。器面は櫛目痕を残し，器肉は1，2より多少厚い。色調は暗褐色で胎土はそれ程良くない。

**4. 甕形土器**（第7図4）

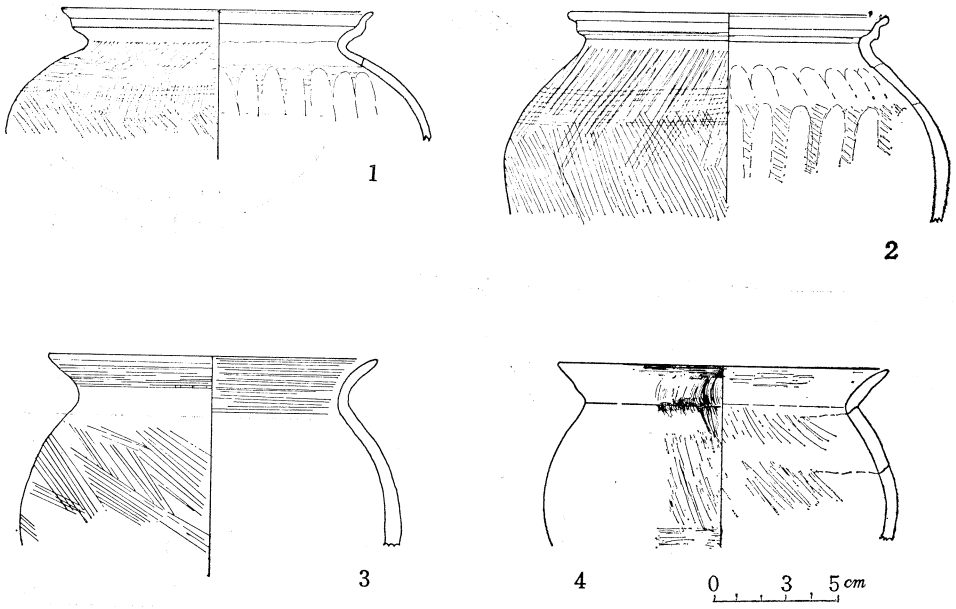
胴下半部を欠している。口径13.5 cm，最大径は胴中位に求められ，14.3 cmを測る。ほぼ球形の胴部から口縁部は鋭く「く」の字形に外反する。口辺部に若干ふくらみをもっている。器外面は非常に細かい櫛状器具により整形されている。横位の櫛描平行線が胴中位に施されているのが，他に見られない特徴である。胎土，焼成とも1と同様である。また成形の際の輪積痕が残されている。

**高杯形土器（第8図5，7，8）**

いずれも杯部のみで，脚部は欠損している。

**5. 高杯形土器**（第8図5）

杯部のみで脚部は欠損している。杯口径は23 cmを測る。杯底部で一担屈折し，直線的に開き，口唇部に至って多少内湾する形態をもっている。




**第7図**　2号住居址出土土器実測図(1)

内外面ともヘラ削りが施されており，胎土，焼成とも良好である。

**6. 高杯形土器**（第8図7）

脚部は欠しており杯部のみである。口径は12.7 cmを測る。杯底部からゆるやかにカーブを描き口縁部に至る。椀形を呈する。内外面とも縦方向にヘラ削りされ，きれいに仕上げられている。色調は茶褐色を呈し，胎土に多少砂粒を混入している。焼成は良好である。

**7. 高杯形土器**（第8図8）

脚部は欠している。前述の高杯形土器と同形態をもつが，多少，浅い椀形を呈する。

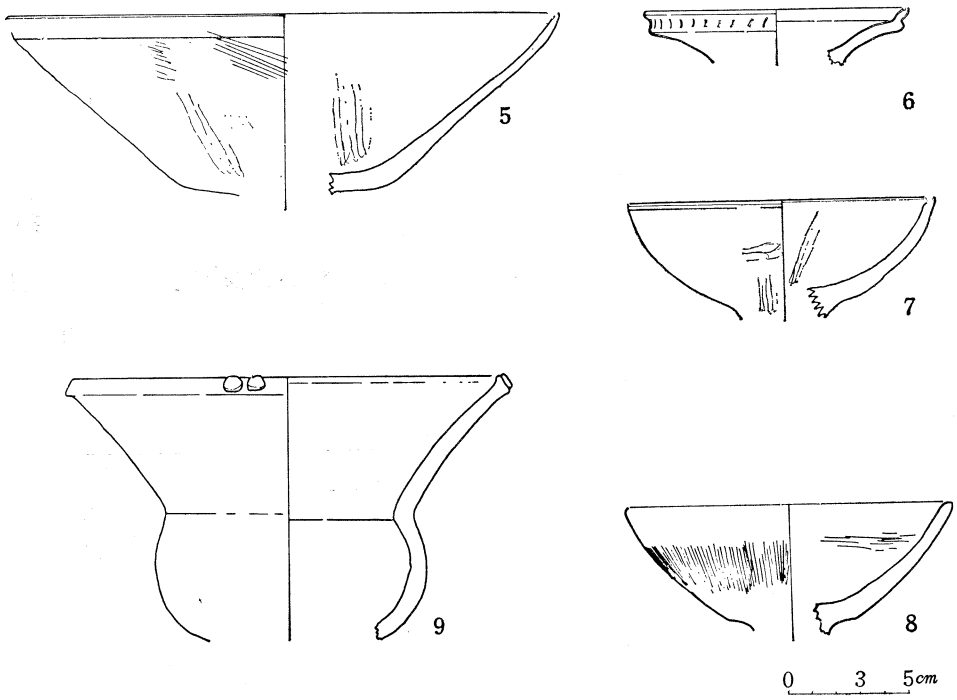
杯部中位外面にヘラ先きによる縦方向の条痕が施されているのが特徴である。

**8. 坩形土器**（第8図9）

底部は欠しており，不明である。口径18.5 cm，器高は推定12 cmである。球形の胴部に漏斗状の口辺部がつく。その口辺部は多少，外湾する。口唇部に二個の小円形添付文が付いている。胎土にかなりの砂粒を含み，器面はザラザラしており粗い。色調は茶褐色を呈している。

**9. 器台形土器**（第8図6）

小型の杯状の器受部のみである。器受部口径は11 cmを測る。器受部の口縁部は立ち上がり口唇部で外反する。口唇部に刻み目が施されている。




**第8図**　2号住居址出土土器実測図(2)

## 第3節　3号住居址の遺構と遺物（第9図）

本住居址は，2号住居址の周溝を調査していく段階で床面を確認し，その存在が予想されたものである。

**遺　　構**（第9図）

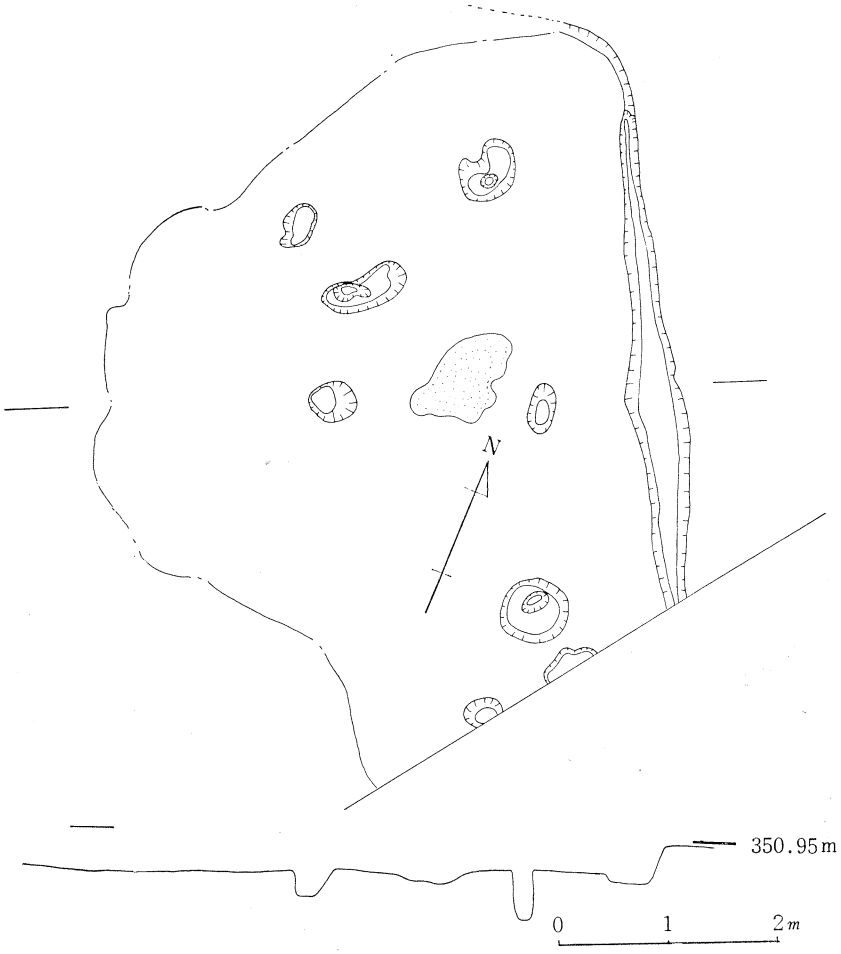
本住居址西側は攪乱により遺存状況は悪く，住居址の約東側半分が残存しているのみである。

そのため，規模は正確に把握する事は困難であるが，床の状況，ピット等の配置等からして，南北7mを上回るものと推定され，同遺跡集落中，最大級の住居址と思われる。

北東隅の状況から隅丸方形を呈するようである。

床面は，他の三住居址よりさらに堅固でありその検出は容易であった。

ピットは数カ所から検出されたが，北東隅のピットと南東隅のピットは，いずれも柱穴らし




**第9図**　3号住居址実測図

き様相を示しており柱穴と想定できよう。

炉は，住居址の中央やや東側よりに構築されており，焼土範囲は1m×0.5mの分布を示している。東壁に巾30cm深さ5cm程を測る周溝らしきものが検出された。

遺物は，ほとんど見あたらず，わずか住居址南側に小破片を検出したのみである。

**遺　　物**

住居址床直上から焼土に混じって小破片が若干検出できただけである。

いずれも実測不可能で形態もわからない。胎土，焼成，刷毛による調整からして五領期の土師器と推測できる。

## 第4節　4号住居址（第10図～第12図）

本住居址は，1号住居址の下層に構築されており本遺跡の住居址中最も保存状況が良かったものである。出土遺物も豊富で，住居址のほぼ中央に集中的に散乱しており，一括出土している。更に玉類も床直上より検出されている。

**遺　　構**

本住居址の規模は東西4m40cm，南北4m70cmで隅丸方形を呈する。炉は住居址のやや北よりに設置されている。15cm程床面を掘り窪めて構築されており，東西50cm，南北80cmのレンズ状に焼土は堆積している。焼石が一つ，炉の中心部から検出されている。

住居址西側には，小ピットが二ケ所で検出されたが柱穴と思われる。他には見当たらない。住居址の東側隅には，1.8m×0.9m程のピットが検出された。このピットをめぐり周囲をとりまく形で盛り上り部分が見られる。また，このピットから壺形土器が検出されており，貯蔵穴と想定できよう。

竪穴の四周に幅10cm深さ5cm～8cm程度の溝が検出できた。壁高は，周囲いずれも約20cm～30cmである。床面は堅固で非常に良好である。

土器は，住居址のほぼ中央に集中して見られ，混じって玉類も検出された。

本住居址の東南部はアスファルト道路のため完掘できなかったが，ほぼ全容は明らかになったと思う。

**遺　　物**（第11図，第12図）

本住居址より多数の土器片が出土したが，器形が判明したものは，甕形土器，壺形土器，高杯形土器，甑形土器，器台形土器，特殊なものとして蓋形土器の12個体である。

以下順を追って概述する。

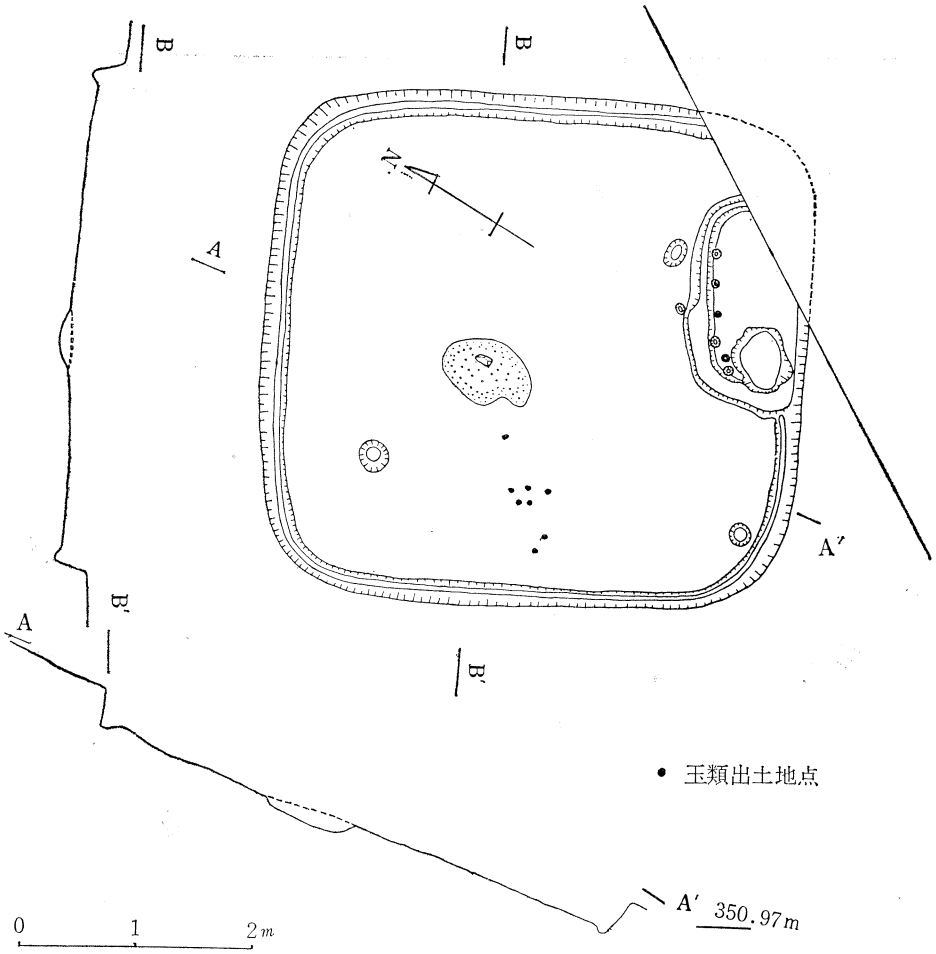
**甕形土器**（第11図1～3，第12図5）

甕形土器には，平底甕形土器と台付甕形土器の二種類があるが，当遺跡出土の甕形土器には

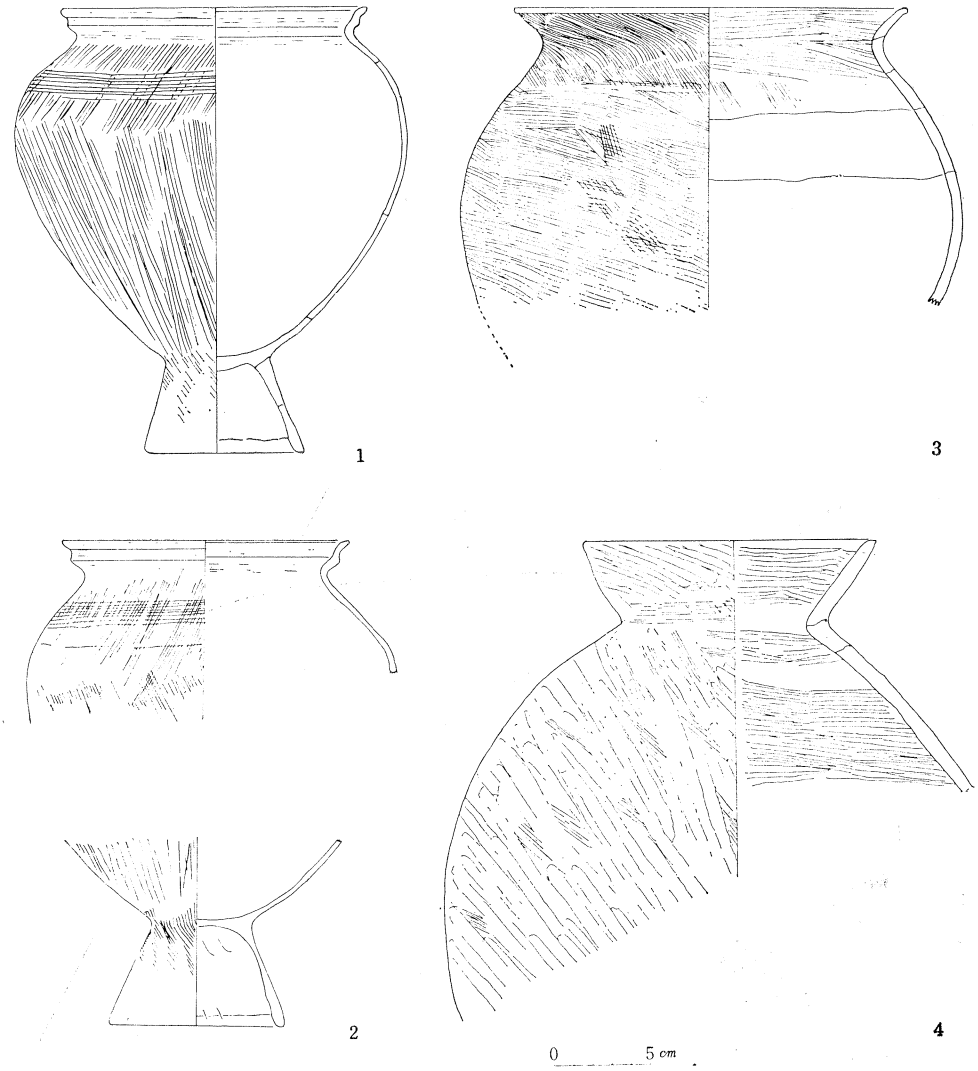
台付のそれが圧倒的に多く，復元不可能の遺物中にも台付甕形土器の破片が数多く見受けられる。更にまた，口縁部がいわゆる有段口縁を呈するものが多く特徴として指摘する事ができる。

### 1. 台付甕形土器（第11図1）

器高23cm，口径16cmを測る。口縁部は短かい有段状となり屈曲する。胴部最大径は25cmで胴部上半部に求められ，器形的に肩に張りをもつ形態となる。器面は煤けて黒褐色を呈する。器面全体に斜方向の櫛目痕が見られる。更に，肩部に5条ないし8条の横位の櫛描平行線を施しているため，交わり，斜格子目文が作り出されている。台部については，下端部が内折している。胎土には砂粒を多く含み器肉は薄い。焼成は良好で非常に固く全体的に軽い感じがする。成形の際の輪積痕が全体にわたって明瞭に残されている。




**第10図**　4号住居址実測図




**第11図**　4号住居址出土土器実測図(1)

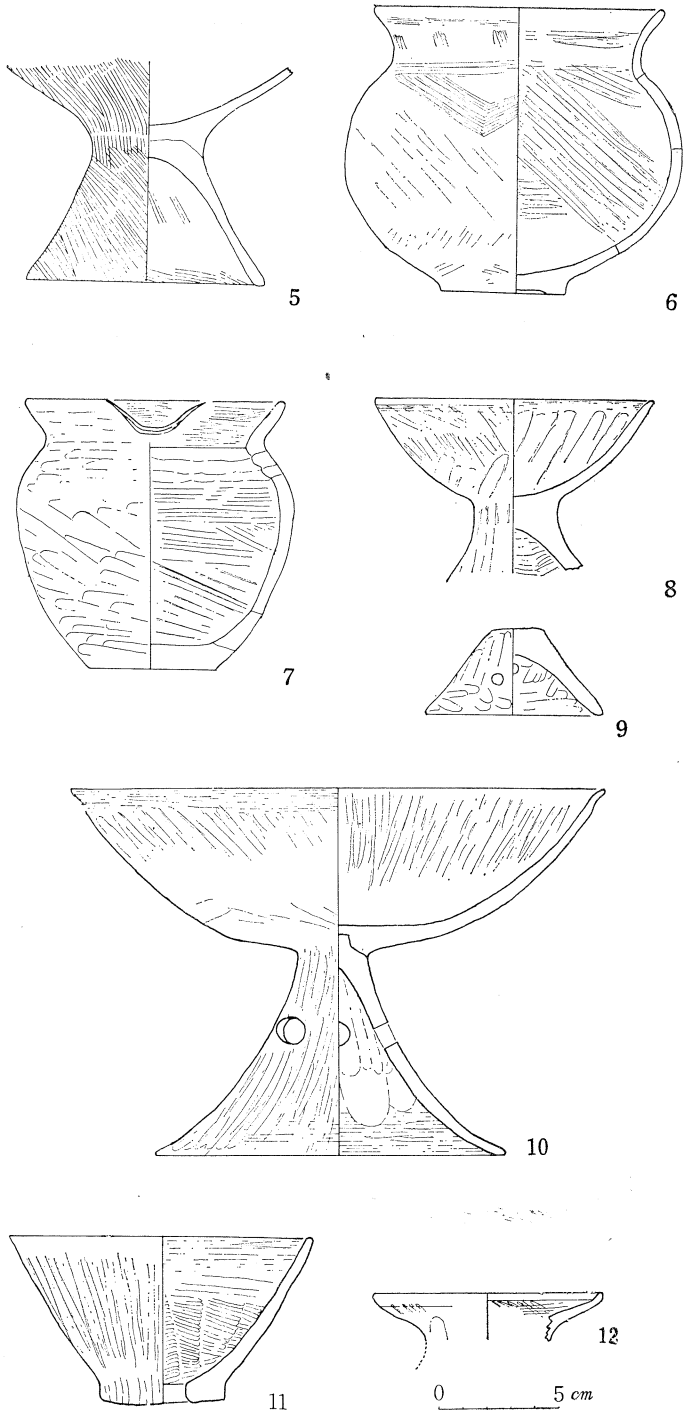
**2.　台付甕形土器**（第11図２）

器高25 cm，口径15 cm，最大径は肩部にあり，19.3 cm を測る。

１の台付甕形土器と形態を同じくする。若干有段口縁が長いようである。胎土，焼成とも同様である。台部の下端が内折する。

**3.　甕形土器**（第11図３）

胴下半部は欠損している。胴部はほぼ球形を呈しており，最大径は，胴中位に求める事ができよう。26 cm を測る。球形の胴部より頸部に至り「く」の字形に直線的に外反する。口径は23cm である。器面全体に斜方向の櫛目痕を残している。胎土には砂粒を含み、器肉は薄い。




**第12図**　4号住居址出土土器実測図 (2)

1・2と同様に全体的に煤けて黒褐色を呈し，形態を同じくする。輪積痕が残されている。

**4.　台付甕形土器**（第12図5）

台のみで他は欠損している。全体的に黒褐色を呈しており，器肉は薄く固い。台下端部は内折していない。前述の1・2とは若干趣を異にしている。

**壺形土器**（第11図4，第12図6，7）

壺形土器は，甕形土器に比較し量的に少なく，本住居址で器形が判明できたものは三個体である。

**5.　壺形土器**（第11図4）

胴下半部は欠損している。口径は15.5cmを測る。最大径は，胴中位か下位にあるようである。ほぼ球形の胴部から頸部に至り，口縁部は鋭く「く」の字形に直線的に開いている。口縁部は内外面とも粗い櫛目痕を残しているが，胴部外面の調整は刷毛で行なわれ，その上をヘラ削りで丁寧に整形され仕上げられている。胴部内面は，細かな横位の刷毛目痕をそのまま残している。胴上半部は茶褐色を呈するが，下半部は煤けて黒い。胎土は精選され，焼成も堅緻である。全体的にきれいに仕上げられている。

**6. 広口壺形土器**（第12図６）

器高 12 cm，口径 12.2 cm を測る。胴部最大径は胴部中位にあり，14 cm である。 球形の胴部より頸部に至り緩く外反する。器面は煤けて黒褐色を呈し，器肉は薄い。 内外面とも全体に刷毛目痕を残している。胎土，焼成とも，１・２・３の甕形土器と同様である。 底部は平底である。

**7. 片口付壺形土器**（第12図７）

器高 11.3 cm，口径 11 cm を測る。胴部最大径は，11.5 cm である。 器形的に細長く，口唇部に片口を伴う。色調は黄褐色を呈し，胎土は選ばれており焼成も良い。器面外面は刷毛目痕をヘラ状器具により整形され，仕上げられている。頸部には，縦位の刷毛目痕が見られる。内面は横位の刷毛目痕を残している。平底である。

**高杯形土器**（第12図８・10）

本住居址出土の高杯形土器は二個体であり，大型のそれと小型の二器種ある。

**8. 高杯形土器**（第12図８）

脚部の一部を欠損している。口径 11.7 cm を測る。 器高は 8 cm 内外と推定できる。口縁部からゆるやかなカーブを描きながら脚部に至り，椀形を呈する。外面には口縁部に若干刷毛目痕を残しているが，全体的に粗くヘラ削りされている。 杯部内面は丁寧にヘラ削りで仕上げられている。胎土は精選され，焼成も堅緻である。

**9. 高杯形土器**（第12図10）

器高 15.5cm，口径 22.5cm。円錐状に開く脚部に比べて，杯部が大きい点が指摘できる。杯部は内湾しつつ立ち上がり，口唇部でわずかに外反する。 脚部には３個の円孔を穿っている。

器壁は薄手で，全体的に入念に研磨されている。 脚部外面には縦方向のヘラ削りが施されている。胎土は精選され，焼成も良好である。

**10. 蓋形土器**（第12図９）

裾が直接的に開いており，つまみは作られていない。器高 3.5 cm，脚径 7.5 cm を測る。 下位に小円孔が穿がられている。外面は縦方向の，内面は横方向のヘラ削りが施され，仕上げられている。色調は赤褐色を呈する。胎土は精選され，焼成も堅緻である。

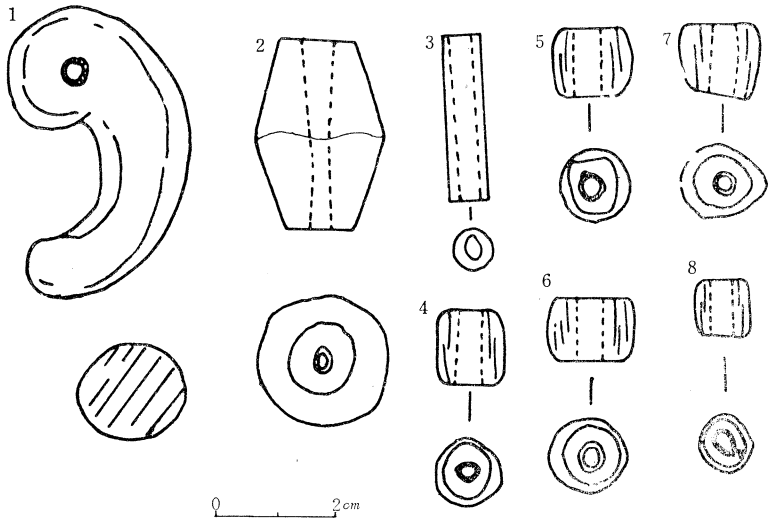
**11. 甑形土器**（第12図11）

鉢形の甑で，口径をもって最大径とする単純な器形である。器高 7 cm，口径12.5cmを測る。底部は平底で単孔である。外面には縦位，内面は横位の刷毛目痕が残る。胎土，焼成ともそれ程良くない。

**12. 器台形土器**（第12図12）

小型の杯状の器受部のみで，他は欠損している。器受部の縁はわずかに立ち上がる。 器受部の内面はヘラ削りが施されている。胎土は精選され，焼成は堅緻である。

## 玉　　類




**第13図**　4号住居址出土玉類実測図

調査で検出された玉類は，勾玉1，管玉1，切子玉1，丸玉5　である。

いずれも住居址南側床面から一括して出土したものである（第10図参照）

**勾　　玉**（第13図1）

長さ27mmの瑪瑙製である。

孔径は上面2.5mm，下面2mmで穿孔は一方からである。勾玉特有の形状を呈しており，濃い飴色の半透色で全体的に丁寧に琢磨されている。

**管　　玉**（第13図3）

長さ15mm，直径3.5mmで碧玉製である。細身の管状を呈しており，穿孔は一方からである。孔径は約2mmであり，きれいに琢磨されている。

**切　子　玉**（第13図2）

最大長17mm，最大巾12mm，面径は上面7mm，下面6mmで孔径は上面で3mm，下面で2mmである。瑪瑙製の円形に近いような形状を呈している。穿孔は両方からである。

| No. | 色　調 | 長　径 | 高　さ | 孔径平均値 |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 濃紺色 | 6mm | 7mm | 2.3mm |
| 5 | 〃 | 7 | 6 | 2.5 |
| 6 | 〃 | 8 | 6 | 2.5 |
| 7 | 〃 | 7 | 7 | 2.4 |
| 8 | 〃 | 5 | 5 | 2.0 |

**丸　　玉**（第13図４～８）

濃紺色をしたガラス製であり，５個検出している。形態等について表の示すとおりである。

## 第５節　考　　察

### 1．集落址の様相

以上，各住居址及び出土遺物について，その概略を述べてきたが，ここで住居址の形態，特徴，構造上の問題点などを整理してみよう。

京原１号住居址～４号住居址はすべて隅丸方形の形態を有し，住居址内には周溝を備えていることは，ほぼ共通した特徴として指摘することができる。

更に貯蔵用ピットを備えている住居址もある。４軒ともそれぞれ複合状況を示している事はくり返し述べてきたところであるが，いずれも下層の住居址の方が概して規模は大きい。この点を集落単位としての共通した特徴としてあげる事は，わずか４軒の住居址からの推察からでは無理であろうが，多くの研究者の指摘しているところでもある。床面は極めて固く踏み固められた状態である。炉は，その床面を中央より若干片よったところに10cm～15cm掘り込んで設置されている。

土師式土器前期の遺跡の住居址として共通したパターンの一つであるこの特徴ある炉について，その構造上炊飯形態との関連からも充分考慮する必要があるし，興味深いところである。

焼土に混じり，一二の角形の焼石が検出されているが，もちろん炉に伴うものとしてよかろう。

一号住居址は攪乱により，その内容は不明確であるが，三号住居址は，遺物が少ない。少ないというよりもほとんど残存していないといった方が適切であろう。

一方，二号住居址の量的豊富さ，更に四号住居址に至っては玉類をも伴出し極めて豊富で良好なセットとしてとらえる事ができる。集落における四号住居址の位置付けは検討の余地があろう。いずれにしても四軒の住居址とも遺物から推察して時間的差位はそれ程みられない。ごく短期間に構築され，使用されたものであろう。

本集落址周辺は，弥生式土器と土師式土器の濃厚な分布が認められる。いずれ集落単位に調査し，研究を進めなければならない時が来るであろう。

土師式土器初現期の解明には，本県においては絶好な地である。その機会を待ちながら現状においては集落論的結論は控えたいと思う。

### 2．京原土器群の様相

京原の出土遺物は，その大半が土師器で占められ，いわゆる五領式土器の範疇に含まれるものであることに今さら多言を要しないであろう。

土師器は主に２号住居址と４号住居址に集中し出土している点も既にくりかえし述べてきた

ところである。

以下，京原土器群を形態的に分析し，あるいは視点をかえながらこれらのもつ特徴を明らかにしていきたい。類別的に，また個別的に分析することが即ち本土器群の様相を解明する鍵ともなるであろうと考えるからである。

**甕形土器**

甕形土器は京原において量的にも質的にも中心的位置を占めているものである。その形態，特に口縁部，器面の調整技法等から少なくとも二分類は可能となる。更に，A類土器においては従来から微々細々に至る分析が試みられ，その成果が報告されているのであるが，京原においては比較的単一な様相を呈しているようである。

甕形土器A類（第7図1，2，第11図1，2，第12図5）

台付甕形土器で口縁部が有段状になっている。胴部最大径は上半部にあり，結果肩に張りをもつ形態となり，無果花形を呈しているのが特徴である。器面には全体的に櫛目痕がみられ，更にその上に横位の櫛描平行線が交わるため格子目文が作り出される。器肉は非常に薄く，胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好で固く焼き上げられている。台下端部の折りかえしについては，あるもの（第11図1，2）とないもの（第12図5）がある。折りかえしのない台部をもつ第12図5については，若干趣を異にし，形態的に検討の余地があろう。本類においては，口縁部はひとしく外方へ開き，また器面には胴上半部に格子目文が施されている。次項で改めて詳細に説明することになるが，本類の甕形土器については大参義一氏によって発生，変化，消滅まで検討され，分類が行なわれている。氏は，台付甕形土器をA類，B類およびC類に分類している。その分類に従えば本類は氏のB類に含まれることに異論がないであろう。氏はさらにB類をもって「B類に至って普遍的な特徴が規格化され定型化すると共に遠く東へ西へ伝幡する」と結論づけている。

甕形土器B類（第7図3，4，第11図3）

平縁で胴部最大径が中位にあり，ほぼ球形を呈する資料を一括した。さらに，比較的大型なもの（第11図3）と小型なもの（第7図3，4）に分けられる。また口縁部の特徴から，ゆるやかに外受するもの（第7図3，第11図3）とそうでないもの（第7図4）に分類ができる。胎土，焼成は第11図3の土器については甕形土器A類と著しく類似している。

**壺形土器**（第11図4，第12図6，7）

復原できたものは三個体であるが，それぞれ器形的に趣を異にしている。共通している特徴としては，いずれも平縁であり「く」の字状に外反している点である。底部については第11図4は不明であるがいずれも平底である。

壺形土器A類

かなり大型な土器である。ヘラ状工具によって器面全体にきれいに仕上げられている。

壺形土器B類

全体的に刷毛目痕を残しており胎土，焼成とも甕形土器A類に似かよっている点指摘できよう。

壺形土器C類

片口を伴っており胎土，焼成とも良好できれいに仕上げられている。

**高杯形土器**（第8図5，7，8，第12図8，10）

比較的小型で脚部の下方があまり開かないものと大型なものとに分類が可能である。

高杯形土器A類（第8図7，8，第12図8）

小型の土器を一括した。杯部はいずれも椀状を呈しており全体的にきれいに仕上げられている。第8図7，8は脚部を欠いて全器形を伺がう事ができないが，第12図8には脚部に円孔は穿孔されていない。

高杯形土器B類

第8図5は脚部を欠いて全体は不明であるが概して脚部に比べて杯部が大きい点指摘できよう。器肉は薄く全体的に器面は丁寧に研磨されているのが特徴である。第12図10も特徴を同じくするが，口唇部は前者に比し外反する。また，脚部には円孔が穿われている。

**器台形土器**

器形が判明したものは二個体である。器受部が形態的に若干趣を異にしている。第8図6の場合，口縁部でいったん小さくくびれて稜を有し口唇部に刻み目を施している（A類）。第12図12は口縁部がわずかに立ち上りつつ内湾している（B類）。

**甑形土器**

4号住居址から鉢形の甑で1点だけ得ている。甑形土器については，その出現，あるいは台付甕形土器との関連について興味ある指摘がなされている。もちろん，甑形土器に関しては当時炊飯形態と大きなかかわりがある問題である。しかしながら，五領期においては比較的類例は少なく資料的に乏しい。京原においてもわずか一住居址からの出土であり，これをもって結論を引き出すには無理があろう。ただ，出現の時期に関して五領式土器の中でもより新しい時期に伴出するものと一般的には考えられているようである。

**蓋形土器**

第4号住居址から1点だけ得ている。つまみが施されず，円孔が施されている形態は古式土師器中には類例に乏しい。富山，福井，島根の各県等比較的北陵，山陰地方に多く見受けられるようである。

**坩形土器**

口唇部に小円形添付文を付した土器である。2号住居址から出土したものである。この土器

についても，この期には類例に乏しい。

さてここで京原土器群の一般的特徴を整理し，要約してみよう。

1．本土器群において最も顕著な特徴は「有段口縁」を有する台付甕形土器の存在である。この土器については，本県はもとより東日本一帯に普遍的な形態として見受けられる。

2．複合口縁を有する壺形土器は五領式土器において典型的で特徴ある土器として理解されているが，京原においては全くその例をみない。

3．器台形土器とセットとして一般に理解されている小型丸底壺の存在が顕著でない。こういった現象は他遺跡でもみられ，問題視されているところである。

4．本土器群は全体に弥生式土器の色彩が残存しているようである。例えば，器台形土器の口唇部の刻み目，片口付壺形土器の胎土，焼成，坩形土器の口唇部の小円形添付文等指摘できよう。

5．甑形土器が伴出している。

最後に，京原土器群を胎土，焼成，整形技法の面を注視し，分析を試みてみよう。これによると，本土器群におおまかに二大別できようかと思う。

第1群は台付甕形土器A類に代表される手法である。器肉は薄く，胎土には砂粒を含み，焼成は良く非常に固く焼き上げられている。器面全体に櫛目痕が残される土器群である。これには台付甕形土器のほか，広口壺形土器（第12図6），甑形土器（第12図11）がある。

第2群は壺形土器A類，高杯形土器等に代表される手法である。胎土は非常に良好であり，器面全体にわたってヘラ調整がなされ比較的明るい褐色を呈している土器群である。壺形土器A類（第11図4），高杯形土器のほか器台形土器，蓋形土器，片口付壺形土器が含まれる。

その他，第8図9，坩形土器は胎土に砂粒を多く含み粗い手法で仕上げられているが，色調は非常に赤っぽい褐色を呈しており第1群，第2群土器の様相とはいくぶん趣を異にしている。

この分類を用途別に考慮するならば，第1群土器群は概して日常什器に使用され，第2群のそれは，貯蔵用又は供献用用具として使用されたものと考えられる。これらは土器製作上，最初の段階からかなり意識的に区別され，胎土を選び整形していったものであろう。

### 3．本県における類似遺跡

——特に甲府盆地及びその周辺地域を中心として——

本遺跡は，五領式土器を伴う遺跡の典型として貴重な資料であるが，この際，本県における古式土師器の様相について総体的に理解を深めるため，既に知られている甲府盆地及び盆地周辺地域を中心とする古式土師器を伴う遺跡を筆者の知見する範囲で整理してみようと思う。

ここに報告する遺跡，遺物は既報告のものばかりであり，未発表分を含めるとさらに増すものと思われ，若干資料不足の感はまぬがれない。その点，大方のご教示を願う次第である。

甲府盆地及びその周辺地域における古式土師器を伴う遺跡は，大きく甲府盆地の低地と盆地東部の曽根丘陵地帯に二分される。古くから，甲府盆地の中心部には縄文式土器，弥生式土器が何度も発見され出土していると見聞している。(註1)

その中で古式土師器を伴う遺跡は，昭和33年甲府市伊勢町地内で下水道工事に伴って多数の土器が発見され，上野晴朗氏によって報告されている。(註2)

伊勢町遺跡は，主として珠文鏡，滑石製模造勾玉が和泉式土器を伴って出土した。その土器に混じり，若干古手の土器が発見され注目されている。このことは，報告者の上野氏も「本遺物は，土器の内容より検討して土師器の形態を有し，標式遺跡としての和泉式土器に属すると考えるがその内容分類により目下注目の土師器のうちの最も古式に属する，一群の土器も含まれている点，いわゆるプレ様式も勘案される」と述べている。すなわち，本遺跡においても多数検出されている。「有段口縁を有し肩に張をもつ形態の台付甕形土器」が壺第二類図31～33として報告されているのである。この土器類は，京原遺物群甕形土器A類に全くの同形態を示している。

更に器台（図49）にしても類似性を示すなど五領式土器の色彩も濃い遺跡として複合性を示す証左となろう。この意味からしても伊勢町遺跡を再分類する必要性を痛感する。

同じく，甲府市内の甲府工業高校校庭遺跡が山本寿々雄氏によって紹介されているが，この遺跡も古式土師器の色彩の濃い遺跡に想定されると思う。(註3)特にＳ５の甕形土器にいたっては，その特徴とするところであろう。いずれも本県における古式土師器の先駆的遺跡として貴重である。

一方，曽根丘陵地帯にしても，早くから弥生時代後期の遺物は，断片的に相当数発見されており，又前期的古墳の集中する地域でもあり，遺物の宝庫として注目されているところである。

山本寿々雄氏は，山梨県における弥生式土期末期～古式土師器の資料として中道町の西原遺跡を報告しているが，この報告にみられる台付甕形土器も「有段口縁」を有し肩に張りをもち全体的に櫛目痕を残す形態であり，(註4)本遺跡出土の甕形土器A類と全く同じ様相を備えている。

さらに同氏は，三球町の大塚遺跡，(註5)豊富村大鳥居の遺跡も紹介しているが，(註6)やはり，同形態のものとしてよかろう。

山崎金夫氏は，中道町笛南中学校所蔵の土器について報告しているが，(註7)この中に器台形土器が紹介されている。この器台形土器は古式土師器特有なものとして特徴づけられているものである。付近の資料を学校に保管したものであろうから，出土地は不明ながら，やはり曽根丘陵地帯には相当の遺跡が予測されるのである。さらに，郡内に目を転じてみると，南都留郡勝山村小海遺跡，(註8)河口湖町追坂遺跡が山本寿々雄氏によって紹介されており，(註9)あるいは同町の浅川遺跡においても同様の遺物が紹介されている。(註10)いずれも，本遺跡甕形土器A類に同形態の特徴を備えている。

以上，簡単に古式土師器と想定される遺物を伴う遺跡を説明したわけであるが，いずれも遺構は，確実には検出されていないように理解している。

しかしながら，遺物は，形態的に同じような特徴を備えており，いずれも時期的にはそれ程差はあるまい。

この中で共通した特徴をもつ遺物は，「有段口縁」を有する台付甕形土器である。既報告の資料は特に，特徴のある台付甕形土器を抽出して報告している傾向が強いと思われるが，本県においてかなり普遍的な傾向を示している。注視すべき現象かと思う。

### 4. 有段口縁を有する台付甕形土器を中心として

和泉式土器以前の土器型式—即ち，五領式土器の存在が提示されて既に久しいが，本県においては土師式土器発生期の様相は未だ明らかになっていない。わずかに前述の上野晴朗氏及び山本寿々雄氏の調査によって，プレ和泉あるいは弥生終末〜古式土師器の土器として示唆されているものの個々的で断片的な報告にとどまっているようである。このことは研究者自身の認識力の不足にも因は求むるが，この期の良好な遺跡に遭遇する機会の乏しかった事にもあろうかと思う。(註11) 京原遺跡は本県のこうした実情からすれば土師前期遺跡としてまことに貴重な資料を提供することになろうかと思う。本県においては，歴史の空白部を一つ一つ埋めていく事が今日最も強く要求されているからである。

五領式土器は，昭和30年，杉原荘介，岡田淳子両氏によって和泉式土器以前のものとして紹介された後，同32年，埼玉県五領遺跡が発掘調査され急速に多くの研究者の注目の的となったものである。(註12)

以来，五領式土器は漠然的には永年の先学諸氏の研究によりその確固たる位置は与えられているようであるが，古墳発生期の諸問題を内蔵する土器として重要と認識されながらも，混沌とし且つ複雑な状況を示しているようである。こういった現状をひきおこしている最も大きな理由の一つはなんといっても土師式土器に対する概念規定が研究者の間で曖昧模糊となっているからであろう。(註13) もちろん，この概念規定は政治的，社会的諸要因を無視して単なる土器そのもののみで論じられるものでないことは言うまでもないことであろう。更に，この命題を煎じ詰めれば個人の歴史感にまで左右されるしろものである。多くの先学諸氏がこの問題にとりくむ中で，岩崎卓也，小出義治両氏により極めて明快な理論が展開され，異彩を放っている事は周知のことである。(註14) しかし，「全国的斉一性をもって土師器の始まりとする」理論は土師器研究者相互に微妙な認識の相異を引き越しているものであり，更に私共在野の土師器研究に取り組む者にとって単純明快に割り切れなく理解しがたい面をもつものでもある。

また従来の「斉一性」理論は小型丸底壺，器台形土器，高杯形土器等を抽出し，認識していった概念規定である。もちろん，これらの「斉一性」の基盤には大きな外的な政治的，社会的

諸要因が作用し，その「斉一性」を生み出し，促していったものであろうから，弥生式土器—土師式土器の一線を画する有力なキーポイントとして考えられよう。

一方，この種の土器の扱い方に比較し，民衆の日常の生活に最も密着した什器，すなわち甕形土器等に対する認識の甘さは研究者内に潜んでいた事は否定できない事実である。(註15) 否，こういった日常什器は外的な政治的，社会的諸要因によって —具体的には古墳発生の原動力等含め—急激な変化をきたすものでないという考え方から軽視されてきた傾向も少なからず見受けられる。

くり返すまでもなく，甕形土器は日常の什器である。これらの土器に対する製作者，使用者の認識は最も生活様式に合致した効率のみを求める，いわゆる生活的用具を最大の意としたことであろう。すなわち，その変化をもたらす諸要因は小型丸底壺，器台形土器にうかがわれるような政治的背景といったものに反し，全くその背景を異にするものである。言わば生活，生産様式の変化，発展に即対応しながら形態的変化をくり返すものであろう。前者は突如として出現する能力があり，結果，弥生式土器との断絶が生じる可能性が大であるのに対し，後者のそれは，弥生式土器から脈々とその系譜をひき，漸時的により使いやすい用具として完成されてきたものである。そういった課程において弥生式土器と土師式土器との接点を明確に区別することは甕形土器に関する限りその頭初から難題をかかえることになる。しかし，弥生文化と土師文化の相異は政治的，社会的諸要因に直接的に裏づけられる資料—具体的にはそれを意図づけるような祭祀的資料— のみによって解明できるものではなかろう。裏がえせば，当時の社会形態は，それのみで成り立つのではなく，日常の生活を含む，あらゆる要因が交錯し複雑にからみあい構成しているものである。

「小型丸底壺の出現」と共に「生活条件の変化を追求する」こともその境界線を引く重要な要素であると既に述べられていることも(註16) 意とするところは同じであろう。

さて，長いこと憶測を述べてきたが，本論の意図するところは，五領式土器研究上のこのような今日的状況の認識のうえにたって，京原及び本県において普遍的でしかも顕著に見い出せる日常什器すなわち，台付甕形土器に主点をおきながら，その研究史等から浮きぼりし改めて問題点を抽出しようとするものである。

力及ばず，その研究史のみに没頭する懸念も多々あろうかと思うが大方の許しを乞うところである。

京原台付甕形土器A類に関して，昭和33年，「いわゆる古式土師器の問題」(註17) のなかで増井義己氏はS字口縁甕形土器と名付け紹介している。続いて34年，向坂鋼二氏は「遠江における古式土師器」(註18) の一文のなかでこの土器を特に抽出し，「この形態の土器がこの地方として突如として出現してくるという状態の背景には弥生文化らしからぬ文化の存在を予想させるものではあるまいか」と弥生式土器にはみられない新しい形態の土器として指摘を行っている。39年に

なり，小林三郎氏は千葉県君津郡富津町大堀出土の「土師式土器」(註19)の中でこの土器を紹介し，「有段口縁部を持つ台付壺形土器は東海地方東部から中部地方，関東地方に分布を示すことが知られており，あわせてそれに伴う土器群の把握されていることから大堀遺跡の年代考定上極めて重要な材料と見られる。」と述べ，更に氏は，群馬県高林遺跡の報告(註20)においても「いわゆる『有段口縁』を持つ台付甕形土器のグループ…この器種は東日本一帯にも分布する標式的なものと思われる。この種の土器群が本来は東海地方において きわめて標式的で特徴的な存在を示していることや関東地方一帯，長野県，山梨県にかなりの分布を示していることから考えてみると，東日本におけるこの種の土器群が演じた土器文化上の役割はまたきわめて大きかったといわざるを得ない。」と指摘し，具体的には平野部の周辺地帯に多くみられ，五領式土器とよばれるグループの中において，比較的弥生式土器と近い関係にある土器群には存在しなく，むしろ第二次的な一歩進んだ段階においてみとめられると示唆に富んだ指摘を行っている。また信濃においても「信濃における古式土師器の位置」(註21)の文中で桐原健氏は茅野・下蟹河原出土土器を代表する土器とし，古式土師器のⅠ期に編年づけている。

こういった研究の段階をふんで大参義一氏は，この種の土器の出現から消滅の過程までの注視すべき研究論文を公表している(註22)。氏は従来，一般的にS字状口縁壺形土器と呼称されてきた一群の土器をそれらのもつ特徴によってa類，b類，c類に分類している。すなわち，氏の分類に従えば，

a　類

S字状口縁の先端が尖り，比較的たちあがり，口縁上部のたちあがりの部分に櫛状具による刺突文を施すものが多く，胴上半部の張りが少なく長円形に近い無花果形をなす脚台は厚手で丈が低く，外開きの類が多く口縁と胴の接合部内面に櫛状具によって整形したあとを顕著にのこす。

b　類

口縁の整形が入念であり，低く外方へひろがるもので，全体に器面の調整が入念で胴は上部において強く張る。脚台は薄手の作りで，立ちあがりがa類よりも急で垂直に近く，先端を内側へ折りまげる傾向をもち，櫛状具による斜位の短線を縦位置に配してめぐらす。肩部の櫛状具による平行線は少くなる傾向がみられる。

c　類

S字状口縁の上半部が直線的で口縁端は厚く仕上げられ，整形もまた入念であり，うす茶色の明るい色調を示す。

氏は更に，従来S字口縁甕形土器とよばれる一群の土器はb類をさしており，b類に至って一般的特徴を具備し定型化すると述べ，b類に至り伝播し，そして五領期のうちに消滅し極めて短期間のうちに広布し急速に衰えることになる，とまことに貴重な提言を行っている。

群馬県大田市の石田川遺跡は古くから古式土師器を伴う遺跡として，その存在は世の知られているところである。この報告において，第Ⅰ種土器は所謂和泉式土器に相当する第Ⅱ種土器以前にあって，空間的にも時間的にも明らかに一様式として認定できるものとして石田川式土器と名付けている。(註23) 石田川式は五領期に相当することには異論はないものであるが，このうち甕形土器は本論のS字口縁の台付甕形土器である。更に石田川においては，時間的位置付けを行っており，四世紀後半から五世紀前半を著しく下ることはないとしている。

こういった先学諸氏のすぐれた研究によって京原の台付甕形土a類の性格及び時間的位置付けは次第に明らかになってくるのであるが，しばらくこの種の甕形土器の普遍化し統一化されていく理由に目を転じてみよう。

我々は既に京原土器群の様相の項において胎土，焼成，整形技法等の面から二つに類別する中で甕形土器a類は第1群中に含まれるものであることは指摘してきたところである。また，この第1群土器は用途上煮沸用具で占められ，日常生活の最も基本たる用具として認識してきた。そして，日常の什器として完成された土器の意味するところは，即この土器のもつ機能上あるいは用途上においても完成された内容をもつ土器であらねばならない。それは単なる土器自身の形態上からのみでなく五領期の炉の構造，炊飯形態等充分考慮推察する中で，その土器そのものの性格をとらえていかなければならない。総括するならば五領期の生活様式に最も合致し適合した土器であり，その結果次第にその座を占めていったものではありわしないか。

我々がこの土器を観察し，直感的にその特徴を挙げるならば，その形よりもまず胎土，焼成，整形技法にあろう。胎土には多くの砂粒を含み，非常に硬く焼き上げられており，他の土器類に比較し，器肉は極めて薄い。硬くあらねばならない理由は，甕形土器の性格上から解ける問題である。すなわち，煮沸用土器の最もその使命とするところは，熱を吸収し早く伝えることにある。熱効用の面から必要なことであり，裏がえせば，この甕形土器は最も熱を伝播しやすく効果的なものであったろう。更に，台部を備えもつことも炉との関係から必要であったし肩に張りをもつ形態も軌を一つにするものとして案出されてきたものであろう。

このように機能上は生活用具として完成された形態をとるがゆえに，ごく短期間のうちに広範囲に伝播し，日常生活をささえる最も基本たる座を占めていったものと考えられる。もちろん，形だけの模倣による普遍化はこの土器に関する限り普遍化を意味しない。土器のもつ機能そのものが，実質的に伝播しているのである。しかるに，この甕形土器の急速な消滅の過程をとる最大の背景には，やはりカマドの導入を考えなくてはなるまい。いわゆる長甕にとってかわられる要因には生活の大きな転機があるのであり，その転換によってもはや不必要となり，消滅していったものと推察できよう。

さて，このようにこの土器の普遍化の実態に即し考えてくると，少なくともこの土器の使用されている期間は生活様式の画一化がかなり広範囲に進んだものと予測されないであろうか。

最も人間社会の基盤となる日常生活の画一化，斉一化はすなわち社会の精神的諸分野までの一率化をもたらす基本である。ここにおいて政治的な，より大きな外的な力によって斉一化されたことを意味するであろう。小型丸底壺，器台形土器等の出現と共に甕形土器普遍化によって内面的な斉一化を意味し，実質的に弥生式土器から土師器へ変遷し古墳文化の確固たる礎を築いたものと言えよう。

京原遺跡の甕形土器A類の性格及び時間的な設定は，既に先輩研究者によってほぼ確立されているところである。今さらくりかえす必要もないのであるが，大参義一氏の分類によるb類に含まれ，石田川による時間的位置付けでほぼ妥当とされ異論のないところであろう。浅学卑才の筆者のため，本論において提示することはできずじまいであったが，今痛感する事はこの種の甕形土器を混じえる遺跡の性格付けと，土器群をセットとして検討していく事であろう。五領期の土器群にはいくつかのパターンが存在する。当然，この種の甕形土器の伴出しない住居址もかなり多く見うけている。この複雑に混在している土器群を類別し，形態的に明らかにし基礎資料を累積していくことが，今最も必要とされているのではあるまいか。

最後に，ここで指摘しておかなくてはならない点は，この台付甕形土器のミニチュアとも言える土器の存在である。今，ここに呈示することは控えねばならないが，筆者の知見した限り甕形土器としての機能を完全に果たせるものではない。形態等については全く類似的な特徴を有しているものの器高は15cm～20cm程度であり，また実際に使用された痕跡も見い出せなく煤等の附着もない。この点から1個体の資料をもって，早急な結論付けは避けたいと思うが，少なくとも，煮沸用具以外の役割を果たしたものと考えざるを得ない。あるいはそこには甕形土器に対する煮沸用具としての機能の絶対視から小型丸底壺，器台形土器，高杯形土器等と同質の性格が見い出せるかも知れないのである。改めて近い将来機を見て提示したいと考えている。

## 5. 結　　語

「有段口縁」を有する台付甕形土器の特異性に目を向け，これを追求していけばあるいは何らかの五領期に対する解明の糸口が見い出せるのではないか……こうした安易な考え方で，いささかとまどいを感じながらとりくんできたものであるが，思い返してみるに，先輩諸兄のすぐれた研究を追従する結果に終ってしまった。

井の中の蛙大海を知らず。ではないが，日頃の近視眼的な見方に陥り，逆に自らが混乱する始末である。改めて，五領期の問題の深さを痛切に感じている。もう一度，出発点にかえりながら，静かに見つめ直してみたいと思うのである。

しかし，「有段口縁」を有する台付甕形土器はもとより，甕形土器に対する形態の分析と研究を重ね，これらの確固たる位置付けと流れを追うならば必らずや新しい視野が開けるであろうと信じる次第である。

また，本県においては，あるいは五領式土器の導入が他より一歩遅れるのではないか。そういった地域性があるのではないかとも推測しているが，これはあくまで直感的であり，憶測の域を脱し得ない現在控えたいと思う。

京原遺跡の位置付けは，本県において弥生式土器終末期の様相と和泉式土器の様相がほとんど未解明である現在，明確に論証することは困難な状況にある。

私共自身，この種の遺跡に遭遇する場合，弥生終末〜土師初頭ではないかと大まかに結論づけ，それを一つのかくれみのにしてきた結果でもある。

こうした認識の仕方では，決してこの時期の解明の何の手がかりも得られないであろう。

今後，量的にも質的にも資料は累積するであろう。その時を期待し，今回はこの辺にとどめておきたいと思う。更に，五領期の細分について，いくつもの考え方があり今だ定まっていないように聞き及んでいる。本県においては，なおさらのこと 体系的な位置付けは示されていない。

こうした現状をかんがみて，京原遺跡出土土器は 五領式土器の範疇に含め，まず本県における土師初現期の土器として認識し，位置付けていきたいと考えている次第である。

註１　昭和44年　甲府市上石田町において土木工事によって縄文時代の遺跡が発見されている。最近は昭和46年　甲府市教育委員会で調査を行なっている。
上石田遺跡　　甲府市教育委員会　昭和48年

註２　山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報　　甲斐史学第７号　　上野　晴朗

註３　山梨県の考古学　　山本寿々雄

註４　土師式土器集成　　本編Ⅰ　　山本寿々雄

註５　前掲　　山本寿々雄

註６　前掲註３

註７　甲斐考古その１　　山崎　金夫

註８　前掲註４

註９　〃

註10　前掲註３

註11　既に本県の類似遺跡の項で述べてきたとおりである。

註12　杉原荘介，中山洋子「土師器」日本考古学講座５　昭和30年。

註13　シンポジューム「五領式土器について」台地研究 №19 の中で重要な提言がなされている。
高橋　護「土師器研究に対する疑問」考古学手帖２　昭和33年。

註14　小出義治「土師雑考」国学院雑誌　昭和34年
岩崎卓也「古式土師器考」考古学雑誌48巻３号　昭和38年。

註15　白石竹雄，高木博彦両氏も「平台先遺跡の特徴」平台先遺跡　昭和48年の報告において指摘している。

註16　青年考古学協議会「連絡紙」3　昭和31年。

註17　増井義己「いわゆる古式土師器の問題」考古学手帖5　昭和33年。

註18　向坂鋼二「遠江における古式土師器」考古学手帖8　昭和34年。

註19　小林三郎「千葉県君津郡富津町大堀出土の土師式土器」考古学集刊3の1　昭和39年。

註20　大塚初重，小林三郎「群馬県高林遺跡の調査」考古学集刊3の4　昭和42年。

註21　桐原　健「信濃における古式土師器の位置」信濃19—8　昭和42年。

註22　大参義一「S字状口縁土器考」いちのみや考古 №13　昭和42年。
「弥生式土器から土師器へ，—東海地方西部の場合」
名古屋大学文学部編集XLⅫ　昭和43年。

註23　尾崎喜左雄，今井新次，松島栄治「石田川—石田川遺跡調査報告」　昭和43年。

（萩　原　三　雄）

# 第4章　出　土　種　子

## 第1節　種子の出土状態と発芽した後の成育状況

8月3日午後4時頃第3号住居址の床面を掃木で清掃中，5ミリくらい発芽した植物を発見した。

出土状態，地層等については下記のとおりである。

3号住居址床面から地表面までの約120 cmで地層セクションは第3図のとおりである。地層は堆積土から成っていて，上層約25 cmくらいは耕作土である。ここには発掘当時桑が栽培されていた。耕作土の下は堆積状態がセクションで明確であった。種子が出土した上部では住居址内に堆積した黒色土（住居址の壁と比較して）は壁との色が明瞭に分けられた。床面は非常に固くしまっていて良好の状態であった。

種子が出土した箇所は住居址のやや東よりであった。更に東側はアスファルトで舗装された道路の下であったので発掘出来なかった。

芽が発見されたのは調査が終了する直前だったが，急拠植松春雄理学博士に現地に来て調査していただいた。調査後40cm×50cm，厚さ20cmに床面を切り取り慎重に木箱に移したが一筋割れ目が出来た。その日暗くなってしまったが筆者の自宅の軒下に運搬した。これは切り取った床面が非常に重いので移動が困難であることを考慮し，日光が当り，管理のしやすい場所と考えたからである。

8月11日に芽が生えている床の一部を10 cm×3 cmの広さで深さ6 cmほど断ち割ったところ，床面の中は1 cm～2 cmの黒色土塊と柔らかい土が混在していた。この中の柔らかい土の中に発芽していない種子がまとまって混入しており，深いもので床面下約6センチ浅いところで2 cmくらいの間にあった。この時の調査で出土した種子数は100粒前後であった。床面は踏み固めた時形成される特有の凸凹があり，芽は凹の柔らかい部分から集中して発芽していた。

この時柔らかい土がつまっいる約3 cmの穴状の部分があったが，蟻等が穿ったものとも考えられないでもないが不明である。

芽の発芽状態や成育については次のとおりである。

種子の発見された3号住居址は7月23日に床面のほぼ全体を見出した。発芽を見た部分は22日に表出している。8月3日までに12日間を経過しているわけである。

8月3日発芽を見た時は大きい芽で約0.5 mmくらいで，小さい芽はやっと地表に出たばかりであった。これらは二ブロックに集中して発芽しており，それぞれ3 cm×7 cmと，4 cm四方くらいの範囲で，その間は10cmである。

この発芽した範囲を全て入るように床を切り取り筆者の自宅に搬入した。

搬入した後も多数発芽し，この中に少数他とは異った芽があった。それは他に比較して双葉がやや細かったので特に観察したところ成長して藜であることがわかった。最も大きい藜で20cmであり，9月上旬に成長が止まった，小さいもので15cmである。他の芽はエノキグサであることを植松博士よりご教示いただいた。エノキグサは3cmくらいに大きくなって，8月下旬には成長が止まった。又8月中旬に一部のエノキグサを露地に移植し栽培したところやはり8月下旬に3cm5mmの大きさで成長が止まった。そのまま放置し降霜のあった後枯れたので種子を採取した。これらの種子は来年播種する予定である。

以上であるが後日切り取って筆者の自宅に搬入した床を断ち割りを行ない調査したいと思っている。　　（森　　和　敏）

## 第2節　出土種子と播種後の成育状況

地下約1.20mの場所と思われる部位からA，B2型の種子が多数一ケ所に集団になって発掘された。

その一つは球形で直径約1.2mmほどで，黒褐色を呈し，一見してアブラナ（Brassica campestris）の種子に似ていた。他の1つBは，稜形で，高さ約1.3ミリで濃い茶褐色を呈し，イヌタデ（Polygonum longisetum De Bruyn）のように思われた。

報告者は，発掘時の昭和48年8月3日以降，昭和48年11月22日まで，A，B両種子の培地を焼土して，他植物種子を無い状態にして，播種してみた。その結果，Aの種子5つは発芽し，それがすべてエノキグサであることが判明した。現在（1973年11月20日）では，それが種子をつけるようになったので，その種（Species）について解説とともに報告する。

### 1. 種　　名

エノキグサ（Acalypha australis L.）

### 2. 形　　質

エノキグサは，茎に斜上に向いた毛をつける1年生草本で，茎は直立して，枝分れし，高さ通常30～50cmであるが，発掘した種子のものは5つが発芽し，その全部が11月22日現在，生育中である。その高さは，それぞれ約9cm，5cm，4.5cm，4cmであり，一般，野生のものに比してやや小型で背が低い。（写真図版16参照）

葉は，長さ1～4cmで，細い枝があり，卵形で膜質，上面には，ねた毛が散生し，裏面には葉脈上に毛がある。葉脈は3～5本，葉の縁には，にぶい鋸歯があり，基部は円形である。

花序は，葉腋に花が1～5個つき，短い柄がある。花序の基部に雌花をつけ，この花には大型の苞葉がついている。

### 3. 分　　布

エノキグサは，日本列島上の平地，特に畑地に広く分布するもので，国外ではウスリー，朝鮮，満州，中国，フィリッピン等の東亜に分布するものである。

### 4. 考察と結論

発掘された種子から発芽したエノキグサが，発掘現場である住居址と，どのような関係にあるかは，ここでは明言できない。

住居址が約千六百年前というような時代のものであってみれば，その古い時代に生育していたエノキグサの種子が，生きたまま現在まで，埋まっていたとは，常識的には信じがたいことである。他の3稜形の種子については，発芽しなかったので，イヌタデらしいということだけで，正しい種名は報告できない。

筆者の観察で，出土した種子の一つが，エノキグサであったことは，森　和敏氏が発芽した状態のまま切り取った住居址床面の一部（40cm×50cm，厚さ20cmで森氏自宅の軒下に保存）及びこの発芽したものを露地に移植したものでも，同一種のエノキグサであったので，このことは筆者の観察結果と一致している。

なお，観察結果で，筆者の播種した鉢植えの中からはマツヨイグサが1本生えたし，また森和敏氏のものの中からはアカザが4本生えてきた。これは，風をはじめとする何らかの要因によって，入りこんだ種子が発芽したものと想像される。

（植　松　春　雄）

# 第5章　縄文時代の遺物

## 第1節　はじめに

縄文時代の遺物は本遺跡全体にわたって見られたが，層位的には出土しなかったので，ここでは，その文様により第1類から第7類まで分類し，その個々について説明する。

本遺跡の出土遺物は諸磯期のものを主とし若干の中期初頭のものを含むものである。本県に於ては，この諸磯期の遺跡としては，八代町花鳥山遺跡，韮崎市天神前遺跡が著名である。

## 第2節　出土遺物

**第1類**（第14図1～11）

第1類は半截竹管様工具により文様構成するものを一括した。1は同施文具により自由奔放に引いたもので，雲母を含み，黒褐色，焼成は良好とは言えない，2～6までは同様な文様構成を有するものである。つまり口辺部無文帯に二条の結節状竹管文をめぐらし，一条は口縁直下に二条目以下は2，4，5の如く斜縄文を施こすのが一般的である。尚5は押引文（樋口他1970）と称されるものである。7と8は同一個体である。7は一条の押引文を引き，それ以下に連続した木ノ葉文を施こしたものである。これらの土器は焼成良好である。9と10も殆ど同様な文様を施こし，地文として縄文を施こしてあり，黒色を帯びた土器である。11は結節状竹管文で区画し，その中に縄文を施こし，諸磯a式に顕著な磨消縄文手法である。焼成も良好である。

**第2類**（第14図12～15）

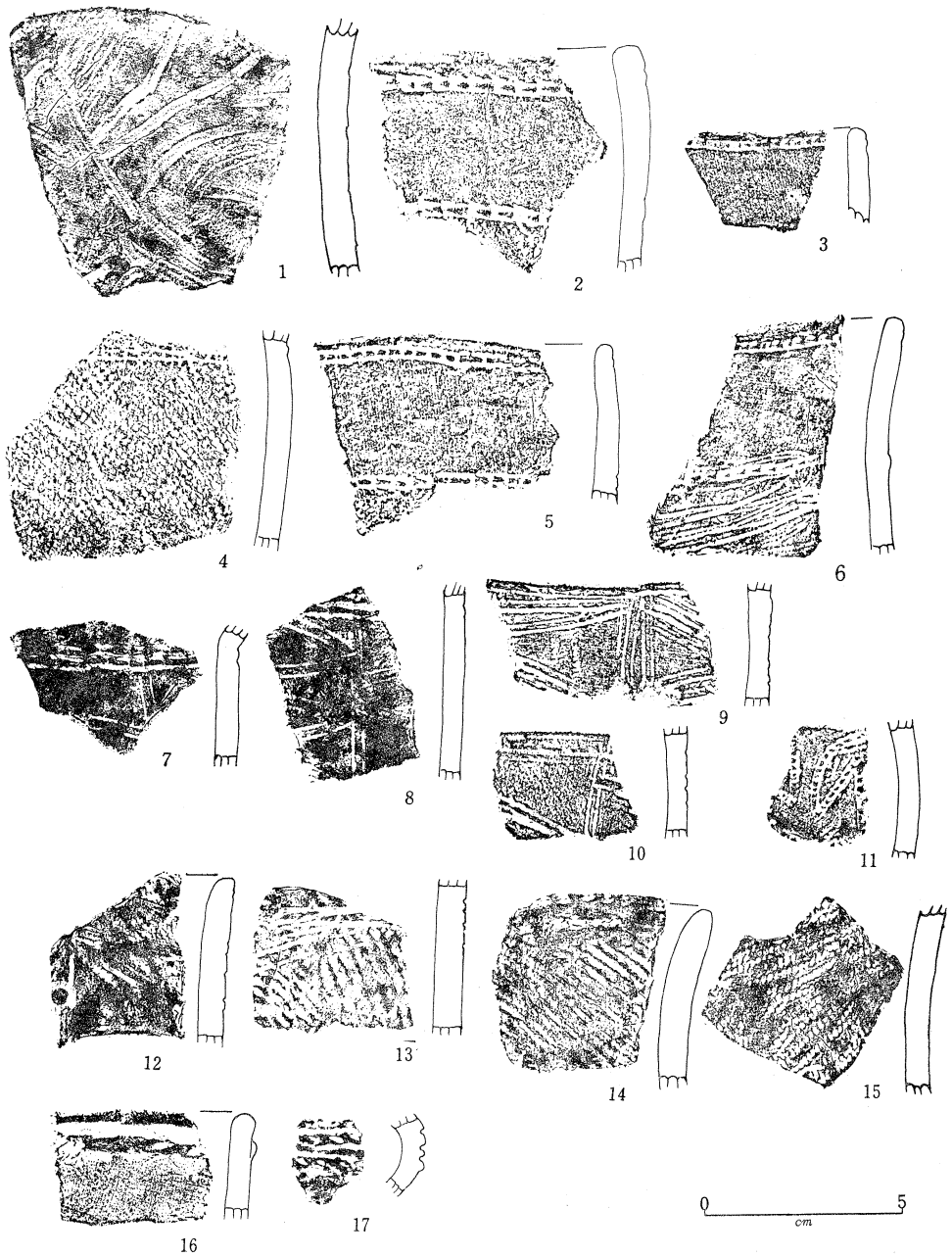
これらは粗い縄文土器を一括した。12は縄文地に半截竹管様工具により幾何学的な文様を構成する。また円形竹管文も施こしている。13は縄文地に半截竹管様工具による平行沈線を粗雑に引いている。14は口縁部無文地に刺突を施こし，以下を斜縄文としている。15は撚りの固い原体で施こされたもので，この類では，異質である。

**第3類**（第14図16，17図）

本遺跡ではこの2片のみしか出土しなかった浮線文土器である。一般の諸磯b式の浮線文が粗い縄文地に数条貼付し，浮線の上を篦状工具で斜めまたは綾杉状に刻むのに対し，これらは浮線の上を細い丸棒状工具により斜めに押引きしている。焼成は良好で赤褐色を呈する。

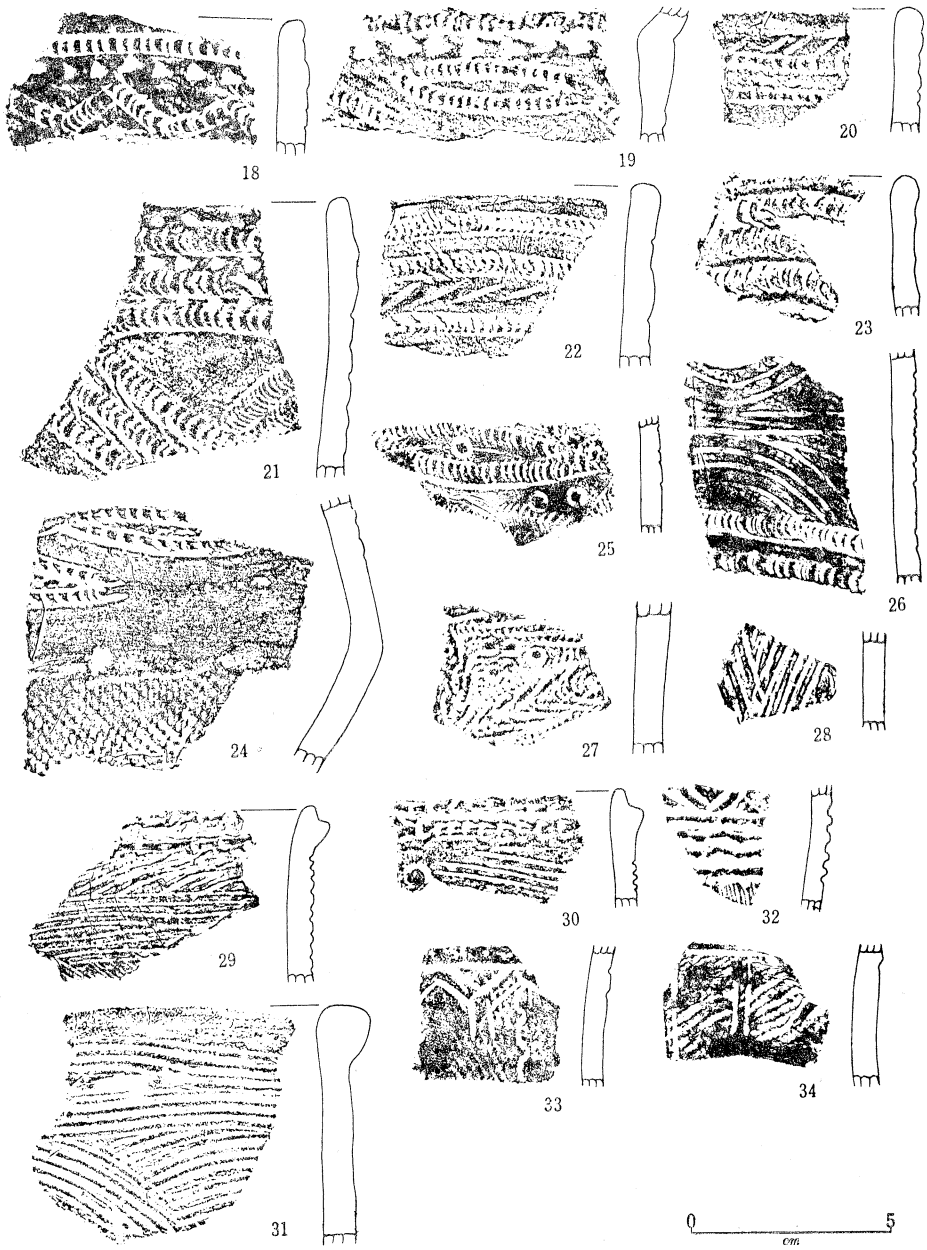
**第4類**（第15図18～27）

爪形文土器を一括した。これらの中には18～22に見られる如く低隆帯をもつものがあり，低隆帯上を18・19・21の如く三角形状に削り取るものと20・22の如く第3類と同様な手法を用いるものとがある。尚この第4類の低隆帯は第3類の如く浮線を貼付するものではなく，器壁か



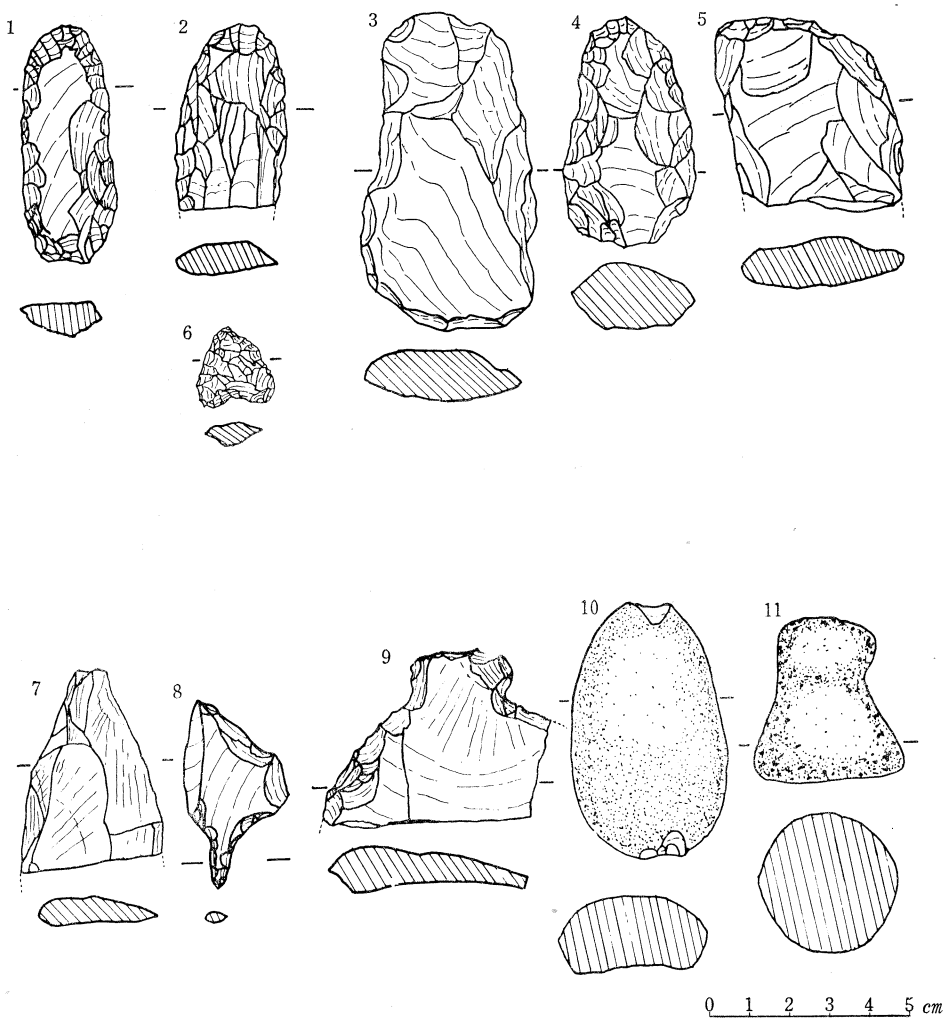

第 1 類　1 ～ 11
第 2 類　12 ～ 15
第 3 類　16 ～ 17

**第14図**　出 土 土 器 拓 影 (1)




第 4 類　18 ～ 27
第 5 類　28 ～ 30
第 6 類　31
第 7 類　32 ～ 34

**第15図**　出 土 土 器 拓 影 (2)




1．尖頭器様石器（玄武岩）
2．　〃　（玄武岩）
3．打製石斧（片麻質頁岩）
4．打製石斧（玄武岩）
5．打製石斧（片麻質頁岩）
6．石　鏃（黒曜石）
7．4号住居址附近打製石斧（泥岩）
8．3号住居址石錐（玄武岩）
9．石　匙　（玄武岩）
10．4号住居址附近第2層石砸
11．軽石製石器　（軽石）

**第16図**　石器実測図

らの盛り上がりである。23は赤褐色の土器片で爪形文帯は凹み，爪形文間が線状に隆起する。19・24・25は同様なモチーフをもつものであり，これは第1類11とも同様なモチーフと思われ，磨消手法は消失するが，24にはわずかにその痕跡をとどめている。26は赤褐色の焼成良好な土器片で，爪形文と幅広な平行沈線を併用している点が注目されよう。平台貝塚（岡野1973）に於いて，中部山地には少ないという指摘があるが，本遺跡では，爪形文を併用して，同一個体と思われる破片が出土している。尚地文は縄文を用いている。27は複雑な文様構成である。加茂遺跡（江坂1952）の図版第6の34にやや類似するようである。第4類の土器は殆どC字形爪形文であるが，22のみはD字形爪形文を有し，灰白色を帯びた土器である。

**第5類**（第15図28～30）

これらは集合条線土器を一括した。28は諸磯c式土器の胴部破片である。29・30は殆ど同様な器形と思われる。口唇部が二つの山状に隆起し，その隆起部に爪形文を施こすものである。この爪形文は第1類・第4類に見られる爪形文より粗雑である。

**第6類**（第15図31）

本類は一片のみの出土であるが，この類は内側竹管によるカマボコ状凸線を主とするものであって，桜沢遺跡（鈴木1958）の第1類Aに類似するものであろう。やはり口縁部にふくらみをもつものである。

**第7類**（第15図32～34）

半截竹管様工具によりはっきりと区画するものである。33，34ともに縄文は粗雑であるが，33はS字状文が垂下する。

**石　　器**（第16図1～11）

本遺跡で出土した石器はどの土器型式に伴うものかは，必ずしも明確ではない。

1，2は玄武岩製の尖頭器であり，1は裏面にバルブをはっきり残す剝片石器である。このような尖頭器は天神前遺跡（志村　1965）にも見られる。

3～5は打製石斧である。4が玄武岩，3，5が片麻質頁岩である。6は黒曜石の石鏃であり，粗雑な作りである。7は泥岩製の非常に扁平な打製の石器である。8は玄武岩製の石錐であり，剝片を利用し，先端をみごとに加工している。9は玄武岩製の石匙と称されるもので，剝片で大形化し，中期的な石匙と言えよう。10は石錘と呼ばれるもので，本県に於ても，多数発見されるものである。円礫の両端を打ち欠くだけのものである。11は軽石製石器および浮標と称されるものである。これについては，出土遺物の考察の項で詳述する。尚石質鑑定は上原稔氏である。

## 第3節　考　　察

土器は2～11までの第1類が諸磯a式に比定されよう。しかしながら2の如き結節状爪形文は施文方法がにぶく諸磯b式的な趣もある。第2類～第4類が諸磯b式に，第5類が諸磯c式に，第6類が諸磯c式直後の型式に，第7類が五領ケ台式にそれぞれ比定されよう。特に諸磯b式に比定される第4類が比較的多く，その出土遺物の大半を占め，第3類の諸磯b式のメルクマールたる浮線文が極く少数であったことは注目される。韮崎市天神前遺跡では第4類に見られる如き爪形文土器は極く少なく，縄文を地文とした細形平行沈線文が諸磯b式の主体を占めている。花鳥山遺跡に於ても，筆者らの表採によれば，天神前遺跡と同様に平行沈線文土器，浮線文土器が大半であった。また関東地方に於ても四枚畑貝塚（金子，和田1969）の如き同様な出土状態を示す例もある。

以上のような出土量の違いに注目せざるを得ない。また近年特に諸磯b式の古式，新式という名称を用いるのに第4類の如き爪形文系土器をもって諸磯b式の古式と称しているようである。

よって現在層位的出土状態は示さないが，出土量の違い，また併行する他型式との比較の中で諸磯b式の細別の可能性が大であると言える。

石器は極く一般的なものであるが，11の軽石製石器は本県では初めての発見であり，他の出土例でも時期が一定しているので，出土例を挙げたいと思う。

| 地　名 | 個数 | 土器型式 | 文献 |
|---|---|---|---|
| 神奈川県諸磯貝塚 | 1 | 黒浜 | ⑧ |
| 〃　鷺沼遺跡 | 1 | 諸磯 | ⑨ |
| 〃　矢上谷戸貝塚 | 1 | 〃 | ⑩ |
| 東京都本町田遺跡 | 1 | 〃 | ⑪ |
| 千葉県加茂遺跡 | 2 | 黒浜 | ③ |
| 〃　旧練兵場貝塚 | 1 | 〃 | ⑫ |
| 埼玉県米島貝塚 | 6 | 〃 | ⑬ |
| 〃　大谷場貝塚 | 1 | 〃 | ⑭ |
| 〃　水子大応寺前貝塚 | 1 | 〃 | ⑰ |
| 長野県巾田遺跡 | 1 | 〃 | ⑮ |

これらの遺跡から出土するものには，いくつかの形態がある。例えば諸磯貝塚の如く石冠形をなすもの，加茂遺跡の如く人形をなすもの，大谷場貝塚の如く塊状のものなどである。縄文後期のものが，一般に称名寺貝塚の出土例の如く，孔を有するのに対し，これら前期のものは孔はなく，紐かけ用の凹みを有することが特色である。尚，京原のものは，加茂遺跡のものに

非常に類似する。

地名表から，関東地方を中心に貝塚地帯に分布し，中部地方にも分布をする。一般に浮標と称されるが，必ずしも，前期の貝塚地帯に普遍的なものではなく，山梨県のような中部山地にも出土することから，別の機能も考える必要はなかろうか。

**参　考　文　献**


① 樋口昇一他『有明山社』1970

② 岡野隆男　『平台貝塚』1973

③ 江坂輝弥他『加茂遺跡』1952

④ 鈴木孝志　「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」考古写雑誌42—2　1958

⑤ 大場磐雄他『上原遺跡』1957

⑥ 西村正衛　「茨城県稲敷郡浮島貝ケ窪貝塚　早大学術研究　1966

⑦ 金子浩昌・和田哲「板橋の考古学」『板橋のあゆみ』所収　1969

⑧ 赤星直忠・酒詰仲雄「神奈川県三浦郡三崎町諸磯における竪穴住居址について」史前学雑誌10—3　1938

⑨ 甲野勇他『鷺沼遺跡発掘調査報告書』1966

⑩ 江坂輝弥「縄文式文化について」歴史評論32号　1951

⑪ 久保常晴他『本町田遺跡』

⑫ 西村正衛「千葉県市川市国分旧東練兵場貝塚」早大学術研究10号　1961

⑬ 柳田敏司他『米島貝塚』1965

⑭ 浦和市文化財調査委員会『大谷場貝塚一ツ木遺跡』第2集　1967

⑮ 森島稔・笹沢浩「長野県埴科郡戸倉町巾田遺跡調査報告」信濃18—6　1966

⑯ 志村滝蔵『坂井』1965

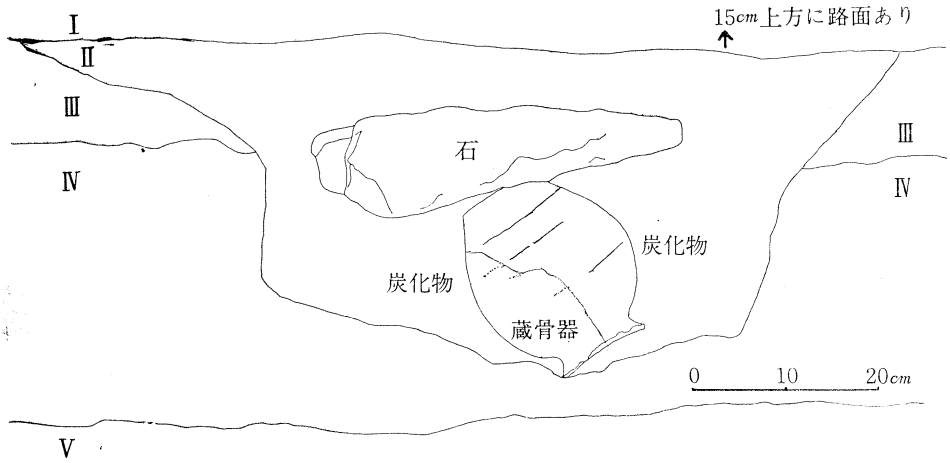
⑰ 酒詰仲雄ほか「埼玉県入間群水谷村水子，大応寺前貝塚調査報告」考古学11の2　1940


（小　野　正　文）

# 第6章　墓　　拡（第17図）

4号住居址を精査していく途中アスファルト道路の下約70 cmのところで陶器の蔵骨器が発見され，墓拡が確認されたものである。道路の下という悪条件のため平面的に遺構を追うことは不可能でやむなくセクションで確認した。墓拡は，直径約1 m深さ35 cmである。第Ⅲ層第Ⅳ層を掘り込んだピットで覆土は第Ⅱ層の炭化物を多く含んだ黒色土層である。墓拡内に陶器をさかさまに置き，その上に長さ40 cm，厚さ10 cmの平らな石を接触してのせており炭化物が多く検出された。

陶器の内部から火葬骨が検出できた。




Ⅰ　やや明るい黒褐色土層。耕作土
Ⅱ　炭化物を多く含む黒色土層
Ⅲ　黒色土層
Ⅳ　Ⅰ層に似た黒褐色土層。若干パサパサしている
Ⅴ　Ⅳ層より若干粗い粒子を含む黒褐色土層

**第17図**　蔵骨器出土状況　実測図

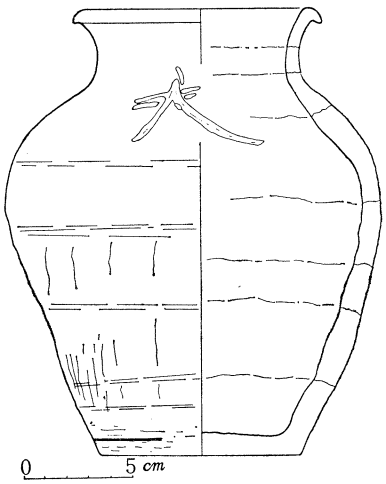
**蔵　骨　器**（第18図）

器高 19cm，口径 10cm，底径 9 cm，胴部最大径 18cm。口唇部は外側へ折り重ねられ，口縁部にかけて緩やかにカーブを描きながら胴部に至る。胴部最大径は上半部に求められ，そのまま底部に向かってすぼまっていく形態をもっている。色調は黒灰色を呈し，焼成堅緻である。胎土には若干砂粒を含み器肉は厚い。肩付近を中心に釉が認められ，また胴上半部に「大」字刻文が施されている。内面には，成形の際の痕跡が明瞭に残されている。

これらの形態等から類推するならば，常滑で焼かれた陶器と見られ，鎌倉後期から室町初頭期頃の所産と推定できよう。

なお，蔵骨器に関し，国学院大学教授樋口清之先生にご教示いただいた事を記し，そのご好意に感謝申し上げたい。

（萩　原　三　雄）




**第18図**　蔵骨器実測図

# 附　　記

以上で京原遺跡の報告を閉じるが，筆者らの経験不足もあり憶測の域を脱し得なかった点多々あった事だろうと思う。振りかえってみるに論理の飛躍に推測を重ね，こじつけ的な結論に終始したようだ。この点，改めて五領期の調査研究を出発点にかえって進めたいと今さらながら考えている次第である。

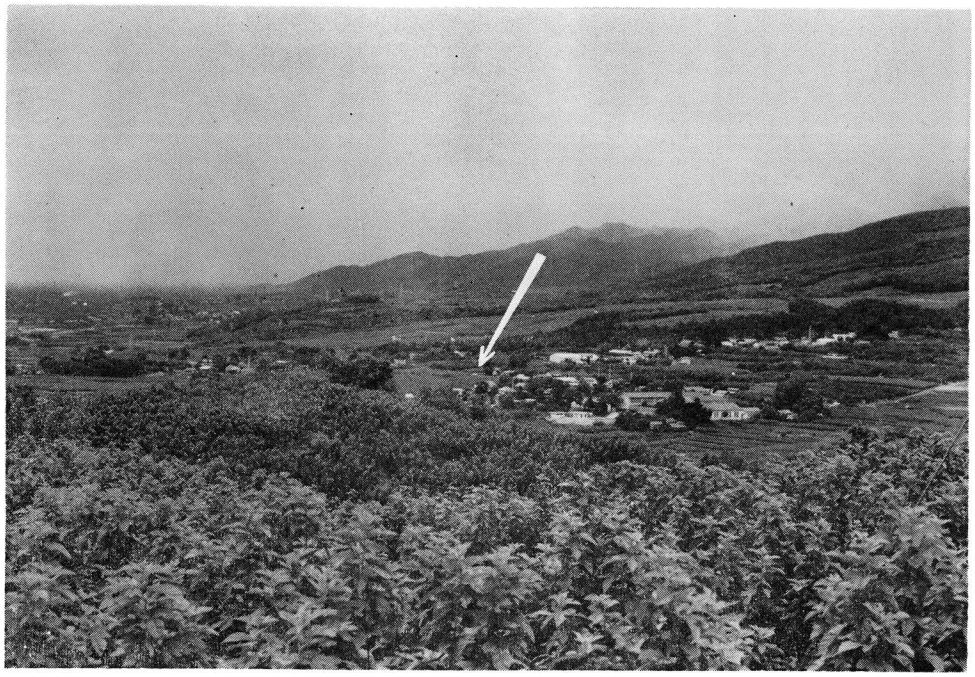
京原遺跡の調査はその終了間際になり種子の発見で論議を呼んだものであるが，調査員どうし賛否両論があり些か私共には問題が大きすぎたようである。参考資料のつもりで，章をもうけ紹介したのであるが，私共自身その真憑性についてもとより自信はない。わずか資料の一つとして扱っていただきたいと考えている。

最後になったが，炎天下五領期の遺跡ととりくみつつ解明の糸口を見い出そうと熱心に調査された学生諸君に改めてお礼申し上げる次第である。また，調査に際し，数々のお力添えをいただいた境川村の皆さんに深甚なる謝意を表したい。

今後の調査研究に期待しながら資料の提示と問題点の提起にとどめた次第である。なにとぞ先学諸兄の御叱正，御教示を賜わりたい。

# 图　　版

## 図版 1



(1) 遺 跡 遠 景

(2) 遺 跡 近 景

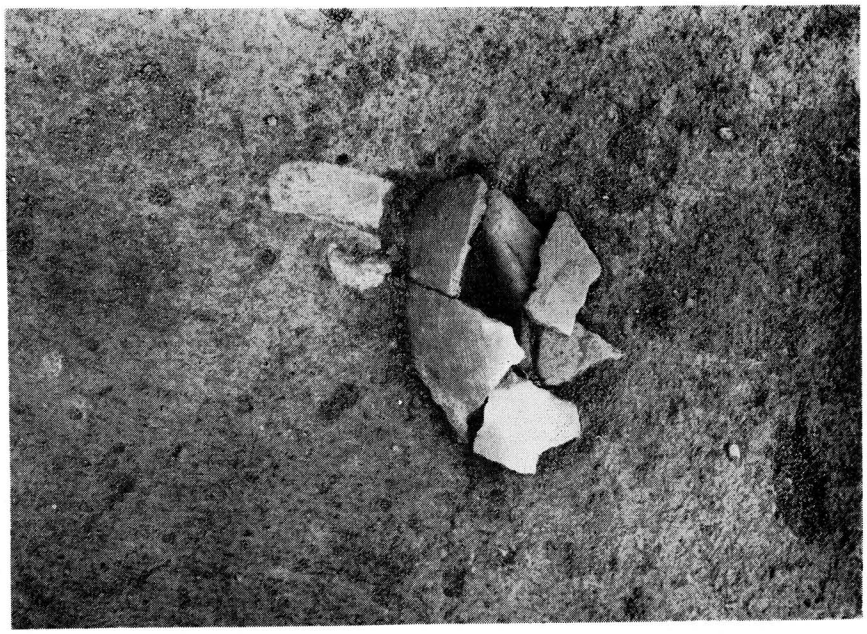
## 図 版 2

(1) 発 掘 状 況

(2) 1号住居址及び4号住居址

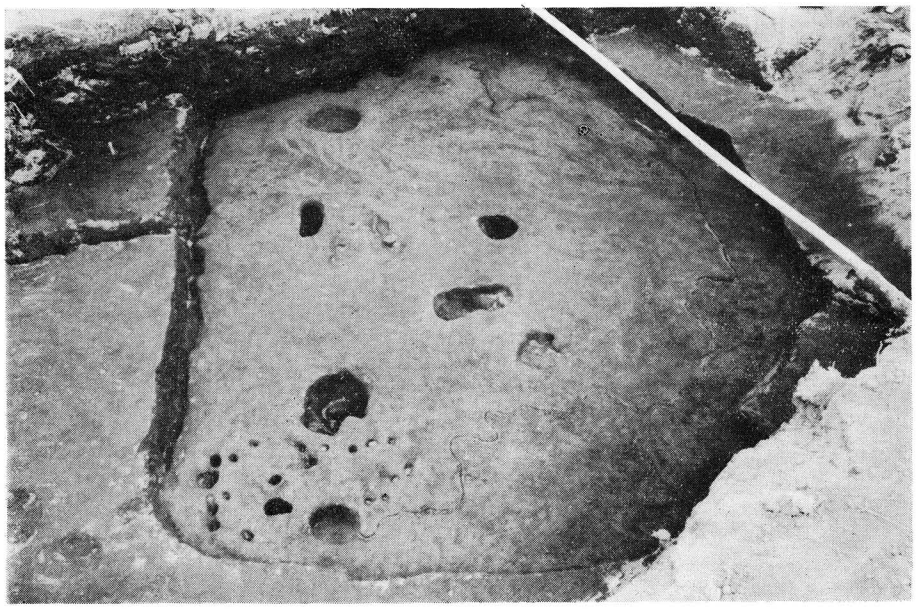
## 図版 3

(1) 2 号 住 居 址

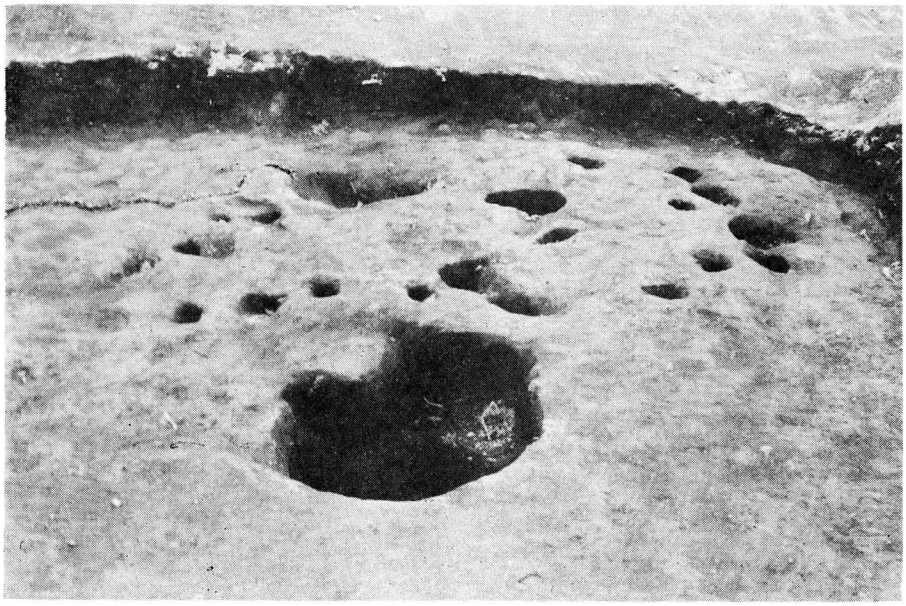


(2) 2号住居址出土土器

## 図版 4

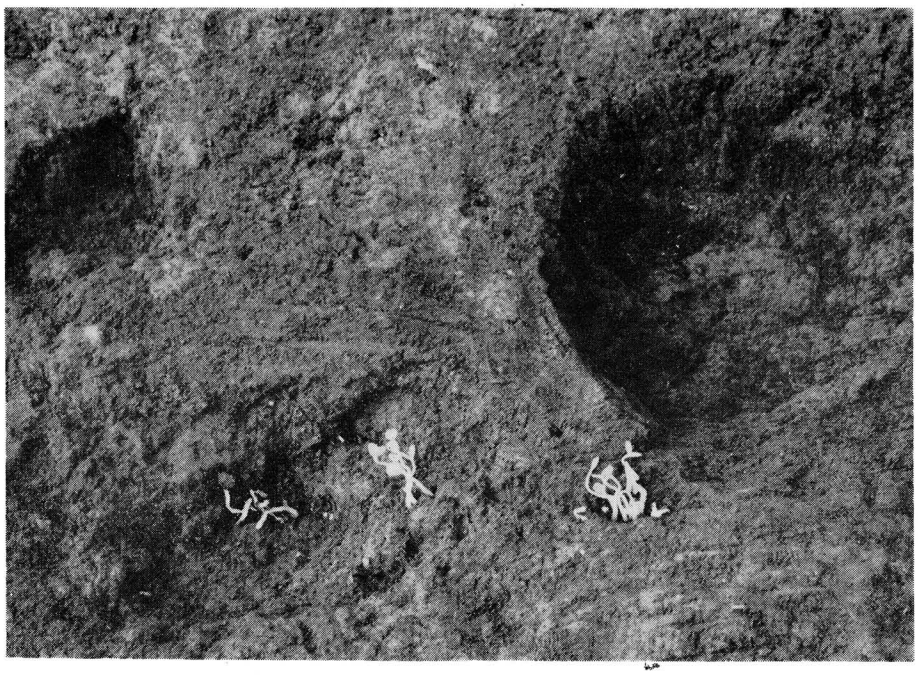


(1) 3 号 住 居 址



(2) 同 上 ピ ッ ト

## 図 版 5



(1)　3号住居址出土種子

(2)　同　　上

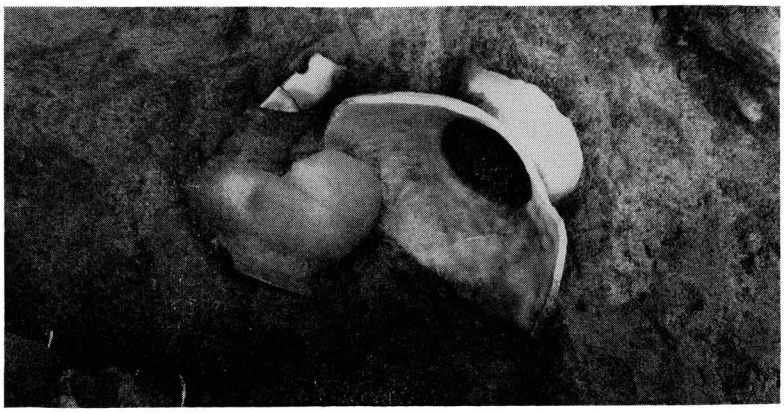
## 図 版 6

(1) 4 号 住 居 址

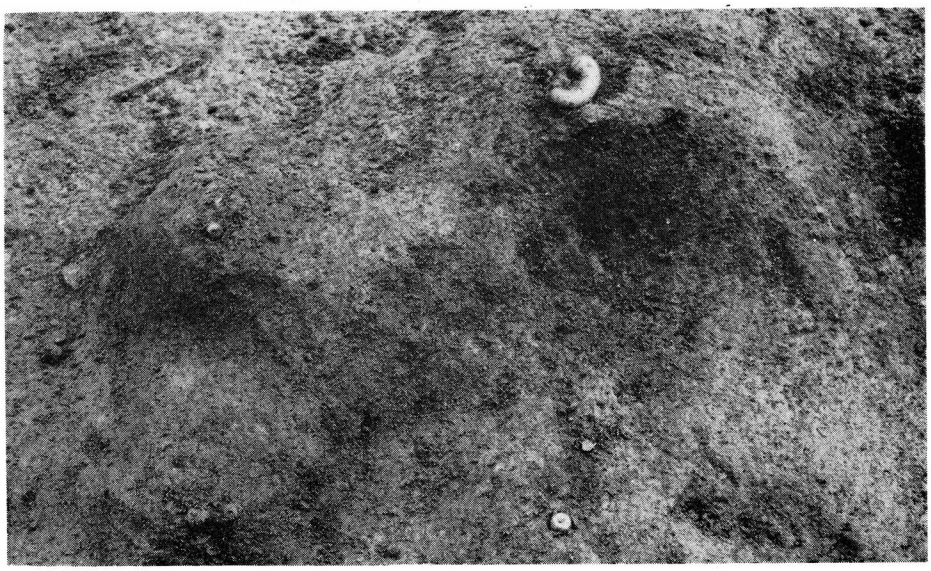
(2) 同上 土器出土状況

## 図 版 7

(1)　4号住居址　ピット及び土器出土状況



(2)　同　　上



(3)　玉　類　出　土　状　況

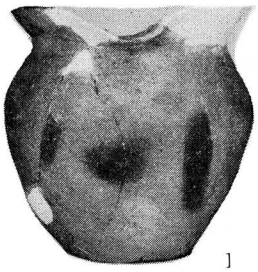
## 図 版 8

(1)　4号住居址　玉類出土状況

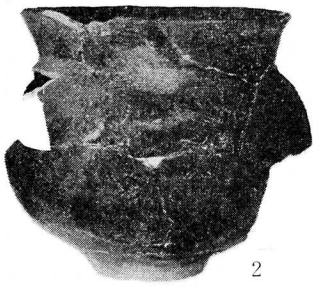
(2)　同　　上　　土器出土状況

**図 版 9**　4号住居址　出土土器

## 図 版 10　4号住居址出土土器及び蔵骨器



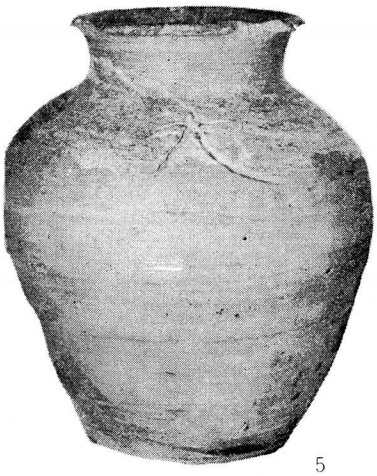
1



2

3

4



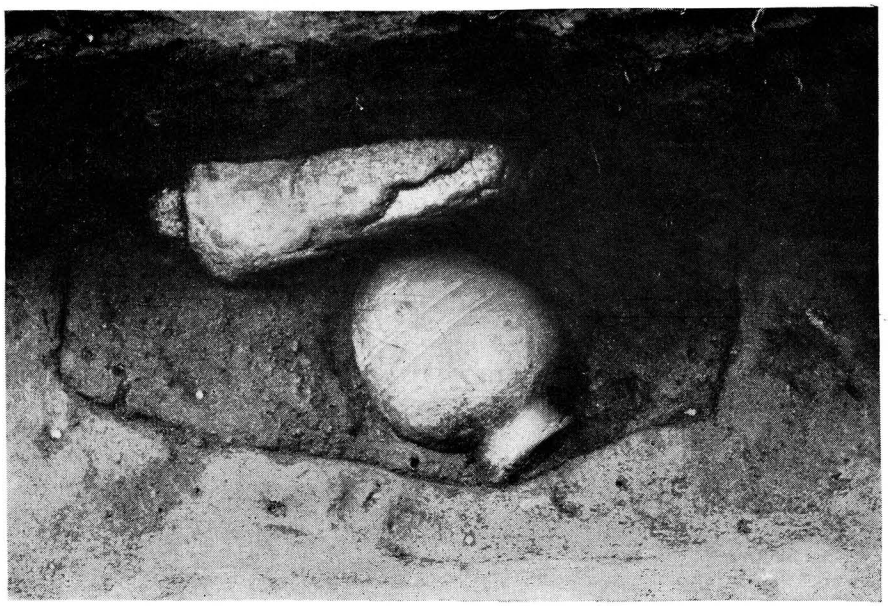
5

1．2．3．　4号住居址出土土器

4．　蔵骨器刻印

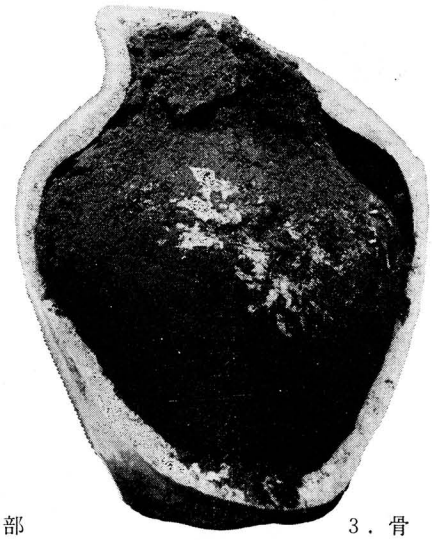
5．　蔵骨器

## 図版 11　蔵　骨　器



1．蔵骨器出土状況

2．蔵骨器内部

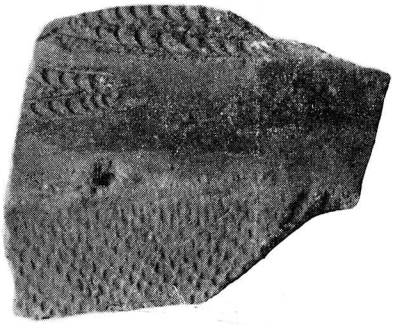


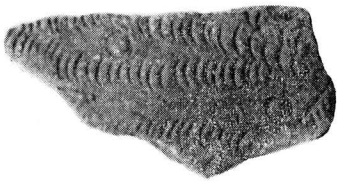
3．骨

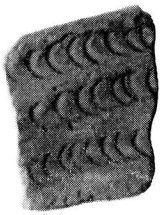
**図版 12**　縄文式土器

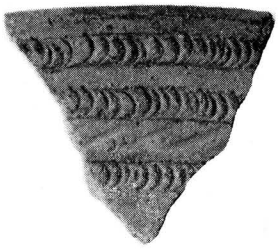
図版 13　縄文式土器

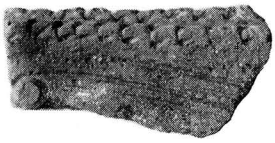
**図版 14**　縄文式土器

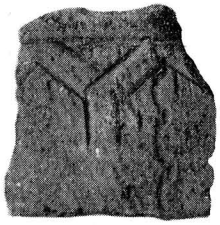


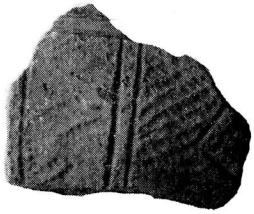




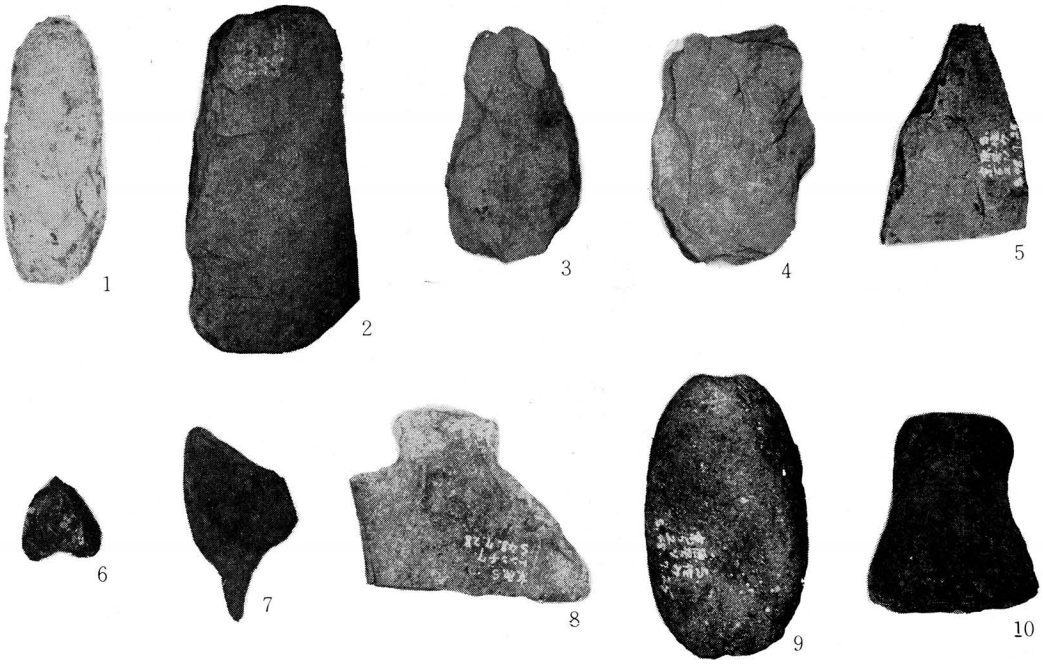


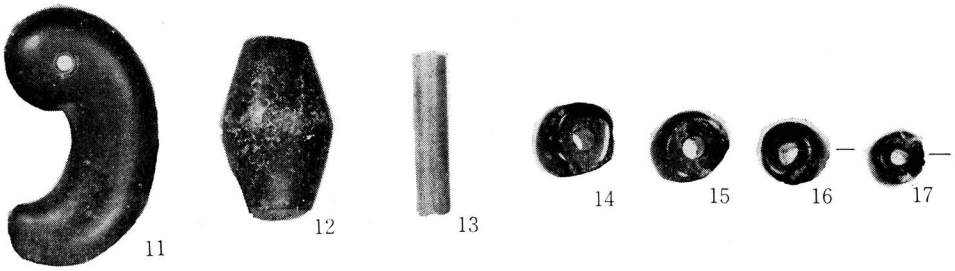






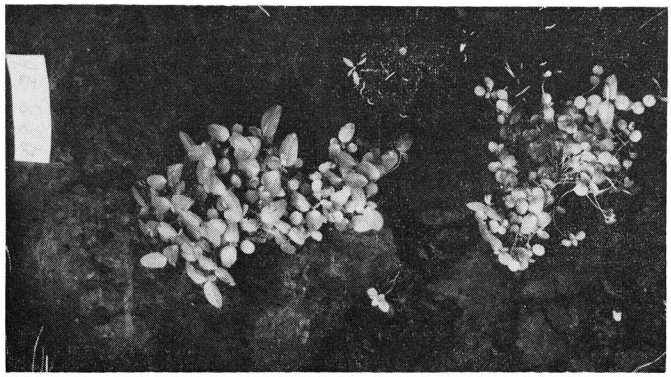
## 図版 15　石器及び玉類



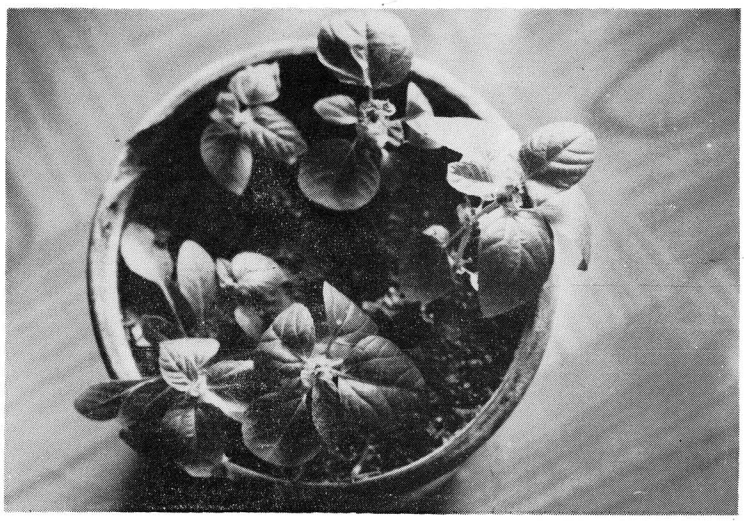

1．C—13G
2．A—24G
3～4．表面採集
5．B—14G
6．C—13G
7．D—11．12G
8．表面採集
9．A—16G
10．D—12G
11～17．4号住居址出土玉類

## 図版 16　種子の育成状況



発芽した床面を切り取り，そのまま成育したもの。
1973．8．26 写

エノキグサ
(Acalypha australish)
1973．8．20 写
発芽後15日くらい



エノキグサ
(Acalypha australish)
左方下にマツヨイグサ属
(Oenothera) の一種が見られる。
1973．11．22 写

京　原

山梨県東八代郡境川村京原遺跡の調査報告書

印　刷　　昭和49年3月　　日
発　行　　昭和49年3月　　日

発　行　　山梨県教育委員会
編　集　　山梨県遺跡調査団
　　甲府市丸の内一丁目6番1号

印　刷　　温故堂印刷株式会社
　　甲府市相生一丁目7番16号